

日本福祉大学社会福祉学部
『日本福祉大学社会福祉論集』第131号 2014年9月

ソ連占領期から1959年までのDDRにおける 生物教授プランの変遷と性教育

池 谷 壽 夫

目 次

はじめに——本論文の課題

第1節 1946年ソ連占領地区教授プランと1947年教授プラン

第2節 1950年代前半の生物教授プランの変遷

第3節 1956年生物教授プランをめぐる議論

第4節 1959年の教授プラン基本構想案をめぐる論争と1959年教授プラン

第5節 1959年の教授プランの特徴と性教育

おわりに——まとめにかえて

キーワード：生物教授プラン，生物教科書，性教育

はじめに——本論文の課題

ドイツ民主共和国（以下，DDR）では，とくに1959年以降，人民教育省とその教授プラン（Lehrplan）が教員の活動を「上から」強く制約・統制していた。したがって，DDRの学校における性教育を検討する際には，その中心をなす生物の教科を規制する教授プランと生物教科書を検討しておく作業がどうしても必要となる。

ドイツ再統一までに出された生物の教授プランを，とくに人間の性の部分を扱う学年を中心にみると，管見する限りでは，以下の教授プランが出されている（表1）。

本論文では，⑫の生物教授プランまでの時期におけるDDRにおける生物の教科における性教育の内容の特徴と問題点を，生物の教授プランと，それにもとづく教科書の変遷，および生物教授プランをめぐる生物教員の専門雑誌『学校の生物（Biologie in der Schule）』（1952年創刊，以下BioS）で行なわれた討論をトレースしながら，明らかにする。その際，生物教授プランはとくに性問題が取り扱われる学年のそれに限定される。すなわち，表1の生物教授プランのう

表1 DDR で出された生物教授プラン

	編者	名称	発行年
①	ドイツソ連占領地区ドイツ人民教育中央管理局 Deutsche Zentralverwaltung für Volksbildung in der Sowjetischen Besatzungszone Deutschlands (Hrsg.)	ソ連占領地区基礎・上級学校用教授プラン. 生物 Lehrpläne für Grund- und Oberschulen in der Sowjetischen Besatzungszone Deutschlands. Biologie	Berlin, 1946
②	人民教育省 Ministerium für Volksbildung der DDR	10年制学校生物教授プラン Lehrplan für Zehnjahrschulen Biologie	Berlin, Leipzig, 1951
③	人民教育省	上級学校生物 9～12 学年教授プラン Lehrplan für Oberschulen Biologie 9. bis 12. Schuljahr	Berlin, Leipzig, 1951
④	人民教育省	基礎学校生物 5～8 学年教授プラン Lehrplan für Grundschulen. Biologie 5. bis 8. Schuljahr	Berlin, Leipzig, 1951
5	人民教育省	基礎学校生物 5～8 学年教授プラン	Berlin, 1952
6	DDR 人民教育省. 授業・教育中央部局 Ministerium für Volksbildung der DDR. HA Unterricht und Erziehung (Hrsg.)	基礎学校生物 5～8 学年教授プラン	Berlin, 1953
⑦	DDR 人民教育省. 授業・教育中央部局	上級学校生物 9～12 学年教授プラン Lehrplan für Oberschulen Biologie 9. bis 12. Schuljahr	Berlin, 1953
⑧	人民教育省	上級学校生物 9～12 学年教授プラン Lehrplan für Oberschulen Biologie 9. bis 12. Klasse	Berlin, 1954
9	DDR 人民教育省. 授業・教育中央部局	中等学校生物教授プラン Lehrplan für Mittelschulen Biologie	Berlin, 1955
⑩	DDR 人民教育省. 授業・教育中央部局	中等学校生物 10 学年教授プラン Lehrplan für Mittelschulen Biologie 10. Klasse	Berlin, 1956
⑪	人民教育省. 授業・教育中央部局	中等学校生物 9～10 学年教授プラン Lehrplan Biologie 9. und 10. Klasse Mittelschule	Berlin, 1957
⑫	人民教育省	10 年制普通教育総合技術上級学校教授プラン Lehrplan der zehnklassigen allgemeinbildenden polytechnischen Oberschule	Berlin, 1959
⑬	DDR 人民教育省	生物科 7～10 学年教授プラン Lehrplan für das Fach Biologie Klassen 7 bis 10. Nachdruck des Lehrplans von 1959 unter Berücksichtigung aller seit 1959 durchgeführten verbindlichen Veränderungen	Berlin, 1966
⑭	人民教育省	生物 8 学年用の精度化された教授プラン Präzisierte Lehrplan für Biologie Klasse 8	Berlin, 1968
⑮	人民教育省	生物 7～10 学年教授プラン Lehrplan Biologie Klassen 7 bis 10	Berlin, 1975
⑯	人民教育省	生物 7～10 学年教授プラン	Berlin, 1982
⑰	人民教育省	生物 7～10 学年教授プラン	Berlin, 1983
⑱	教育科学アカデミー APW	生物 8 学年教授プラン Lehrplan Biologie Klasse 8	Berlin, 1987
⑲	人民教育省	生物 5～10 学年教授プラン Lehrplan Biologie Klassen 5 bis 10	Berlin, 1989
⑳	教育・科学省 Ministerium für Bildung und Wissenschaft der DDR (Hrsg.)	生物 5～10 学年および化学 7～10 学年の教授プランの取り組みに対する指針 Handreichung zur Arbeit mit den Lehrplänen Biologie Klassen 5 bis 10 und Chemie Klassen 7 bis 10	Berlin, 1990

フンボルト大学改革教育学資料館ホームページ

(http://www2.hu-berlin.de/archrefpaed/sw_suche.php5?nr=102645&abt=3&uabt=1&kat=2) より作成

ち、○で囲まれた番号のものを検討することになる（以下、生物教授プランについてはこの番号も併せて表示する）。

ところで、DDR における戦後 30 年の生物の授業の発展を総括した Dietrich/Kummer (1979) は、1979 年までのその発展を 3 つの段階に分けている。すなわち、①第 1 段階：1945 年春から 1949 年までの反ファシズム・民主主義学校改革の時期を含む生物授業の反ファシズム・民主主義的変革期、②第 2 段階：1949 年秋から 60 年代初頭までの、社会主義学校における生物授業の構築期、③第 3 段階：社会主義学校の内容の仕上げ期における生物の授業（1963 年以降）、である（401-402）。

また生物の教授プランの成立から見ると、生物教授プランの変遷の時期は、①ソ連占領期における 1947 年学校法下での暫定的な生物教授プランの時期、② 1951 年生物教授プランから 1959 年生物教授プラン成立までの時期、③ 1959 年学校法下での生物教授プランの時期（1968 年まで）、④ 1965 年学校法下での 1968 年生物教授プランの時期（1989 年まで）、④ 1989 年生物教授プランからドイツ再統一までの時期、の 4 つに区分することができる。

しかし、生物の教授プランを性教育との関係という視点でみていくと、別の段階区分が見えてくるであろう。例えば、第 1 段階は同じだが、第 2 段階以降はだいぶ様相が異なってくる。これから検討するように、50 年代前半と後半では性に関する部分の記述がだいぶ違っている。また、第 3 段階についても 63 年から 79 年までを連続したものとはみなすことはできない。69 年の生物の教授プランは、それまでの 59 年生物教授プランとはかなり質的に異なるからである。さらに、79 年以降の展開を見ると、80 年代の議論を経て出された 87 年の生物教授プラン案は 68 年の生物教授プランとも大きく異なっている。

以下では、1959 年までの生物の教授プランと生物の教科書を検討することをおして性教育上の問題点と課題を検討することにした。

第 1 節 1946 年ソ連占領地区教授プランと 1947 年教授プラン

1. ドイツ学校民主化法（1946 年）

1945 年 5 月 8 日のナチス崩壊後、ソ連占領地域では、8 月 2 日の「ポツダム協定」、ソ連軍政府（SMAD）指令第 40 号（Befehl Nr. 40 der SMAD über die Vorbereitung der Schulen zum Schulbetrieb. 1945 年 8 月 25 日、MONUMENTA PAEDAGOGICA 1970, Band VI: 182）とドイツ人民教育中央管理局（Deutsche Zentralverwaltung für Volksbildung）の施行規則にもとづいて、早くも 10 月から学校が再開された。

Dietrich/Kummer (1979) によれば、この人民教育中央管理局の施行規則と人民学校用暫定教授プランの作成のための添付指針（1945 年 9 月 20 日）にもとづいて、反ファシズム・民主主義学校における生物の授業用の最初の教授プラン（移行教授プラン）も作られた。ここで生物の授業に求められたのは、ナチスの人種イデオロギーと、それにもとづいた他民族に対する支配

へのドイツ民族の使命に関する学説を除去することであった。この新たな教授プランの開発の際には、1933年以前の教授プランもまた参照されたという（402-403, Uhlig1975も参照）。

その後、「ドイツ学校民主化法」（1946年6月12日施行、以下46年学校法）が公布されて、学校の制度と目的が定められていく（46年学校法の条文については池谷2010参照）。

この学校民主化法の特徴として、ここでは次の点を指摘しておきたい。第1に、当時の政治的課題であったブルジョア民主主義革命を教育において徹底させていくための学校法だということである。第2の特徴は、そのために反ファシズム・反軍国主義的精神から子ども・青少年を解放することを目標としていることである。これは、第1条の「青少年をナチスの・軍国主義的見解から解放し、諸国民の平和的・友好的共存の精神と真の民主主義の精神にもとづいて、青少年を真のヒューマニズムへ教育する任務をもつ」という一文に端的に表現されている。第3に、民主主義教育の具体化として、教育の無償化（第5条）と授業の体系性・科学性の保証（第4条）が挙げられる。第4は、学校の管理運営に対する教員、生徒、親の参加が保障されていることである（第6条e, f）。ただし、こうした参加を前提としつつも、最終的には校長が責任の権限を有している（第6条c）。第5に、この学校は男女平等の民主的学校システムだということである（第2条）。しかし、この男女平等は男女共学を必ずしも意味していないことに留意する必要がある（この点については、池谷2010参照）。最後に、戦前と異なり8年制の基礎学校が設けられたことが挙げられる（第2条b）。

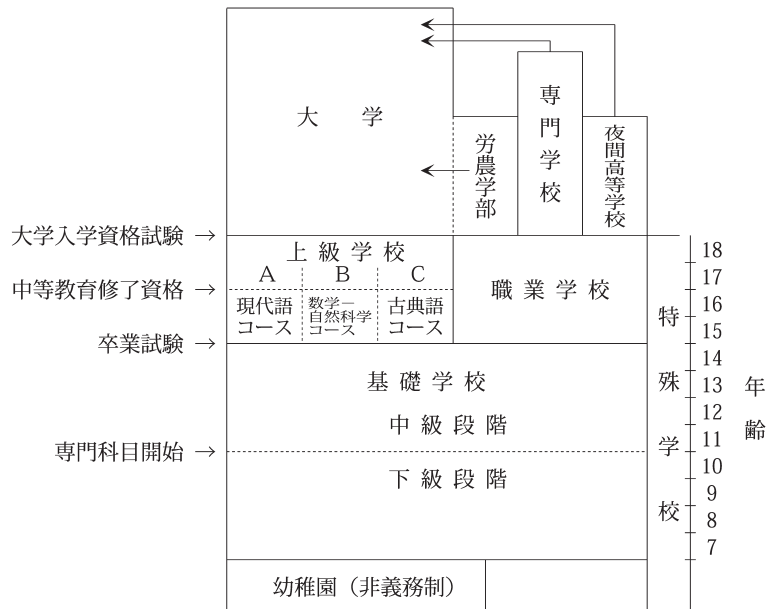
この1946年学校法にもとづいて、学校体系は図1のようになった（池谷2010, 図1: Autorenkollektiv 1960: 384より、安藤・梅根編1963: 153, 参照）。

2. ソ連占領地区基礎・上級学校用教授プラン。生物

この46年学校法にもとづき、同年の7月1日に、ドイツ人民教育中央管理局は、これまでの移行教授プランにとって代わる「ソ連占領地区基礎・上級学校用教授プラン。生物」(①: Deutsche Zentralverwaltung für Volksbildung 1946, 以下1946年生物教授プラン)を出す。「生物の授業目標」は、「生徒に、生物(Organismen)の発展における基本的な合法則性の理解および人間の解剖学と生理学ならびにダーウィニズムの基礎の、後の理解にとって必要な知識を伝達する」(ibid.: 3)とされている。

ここでは、何よりもナチズムの優生学的生物学主義、すなわち社会ダーウィニズムや人種主義の克服が重要な課題とされている。「生徒はとくに、生存闘争をめぐるダーウィンの学説が人間の共同生活には転用されえないこと、個々の人間間、人間グループ間、および人民間の血みどろの対決はこの学説で正当化しえないこと、むしろすべての力は公共の福祉(Gemeinwohl)の向上と真の人間性の実現へと向けられねばならないこと、こうした認識を身につけねばならない。この目標を達成するのに本質的な要因となるのは、ある人種メンバーの他人種による差別は科学的に支持しえず、むしろ北欧人種の支配者立場に関する国民社会主義の学説とは反対に、さまざまな人種のメンバーは人類のメンバーとして同等の権利と義務をもつという認識の獲得である。

図 1 当時の学校体系



目標は公共の福祉の向上と真の人間性の実現である。あらゆる場合において授業は人間と人間の目的に奉仕する」(ebd.).

もう 1 つの特徴は、生物の授業の実践的目標が、「自然の中でのおよび自然における自立的な労働 (……) への教育」とされていたことである。これは、1946 年教授プランがケルシェンシュタイナーの労作学校を高く評価していたことによるものである (深谷 1966: 26)。もっともこの路線はのちに修正主義として断罪されることになる。さらに、「精神的 (seelisch) 価値の展開も真の人間性の教育に属する」として、「倫理的・美的モメント」も生物教育に含めるとしている (ebd.).

第 5 学年から始まる生物教授プランは、次のような構成になっている (表 2)。

これでわかるように、戦後の最初の教授プランでは、まず第 1 に、「人間学」に関する知識を 5 学年から第 11 学年のすべてにわたって教えることになっている。そして第 11 学年の「人間学」の一部で「人間の個体発生」として、性に関する授業が予定されていた。その内容としては受精、胚の発育や出産が中心であった。

1 年後の 1947 年 9 月 1 日には、この間の経験にもとづいて、教授プランは改訂される。もっとも、歴史の教授プランを除いては、ほとんど変更がなかった (Uhlig 1975: 346)。ただ、1947 年の教授プランでは基礎学校の生物では「人間学」は 7 学年と 8 学年だけになった (Tille 1992a: 324)。

その改訂には 2 つの要因があった。一方では、当時の教科書の内容が、ワイマール時代の上級学校 (höhere Schule) で用いられていた教科書から採られていて、1 学年の間に覚えられる量

表2 1946年生物教授プランの構成

教材	時間数	教材	時間数
5 学年 I. 環境から：庭園 II. 庭，家および中庭の動物 III. 公園と緑地，通り，学校の中庭 IV. 野原の狩猟動物 V. 外国の脊椎動物（必修ではない） VI. 健康のケアを含めた人間学 骨格，筋肉，皮膚 VII. 郷土の話に出た哺乳類の体系性に関する概観	120 12 2	6. 植物の働き（植物生理学の実験；呼吸，同化，貯蔵） 7. 脊椎動物 8. 人間の由来と発展 9. 植物，動物および人間の種 国民社会主義の誤った学説	10 4
6 学年 認識するのがむずかしい花卉構造を持った顕花植物 爬虫類，両生類および魚類，昆虫，クモ 人間学：血液循環と呼吸，それらの器官のケア	 6	9 学年—A と C 植物学，必修教材	A C 40
7 学年 A と C の中核授業 環境から／植物界から／動物界から 人間学 栄養と消化 感覚器官（そのケアも含めて） B のコース授業 中核授業で扱われた教材の補充と拡大 人間学 栄養と消化 健康のケアもふくめての感覚器官	A C 40 B 80 8 10	9 学年—B 植物学，必修教材 10 学年—B（続き） 11 学年—A と C 人間学，必修教材 運動器官：骨と筋肉 新陳代謝器官：皮膚，肺，心臓，血液，腸，腎臓，肝臓，腺 感覚器官：神経，感覚 衛生 私的，社会的および公的な衛生 生命論 さまざまな生活年齢の人間／栄養，衣服，住居，労働の衛生 人間の個体発生 卵子，精子，受精，外形の発育	 A C 40
8 学年 B コース授業のみ 完結と総括の章（顕微鏡と解剖の実習と結びつけて） 1. 動植物界の体系についての概観 2. 規定実習（学年を超えて配分された） 3. 動植物界での繁殖・生殖 4. 遺伝学説入門 いくつかの動植物育種（課題と意義） 5. 有害生物とその撲滅（化学的および生物学的な有害生物の撲滅，重要な有害生物の淘汰）	B 80	11 学年—B 人間学 必修教材 運動器官：骨と筋肉 新陳代謝器官：皮膚，肺，心臓，血液，腸，腎臓，肝臓，腺 感覚器官：神経系，感覚器官 一般のおよび公的な衛生 私的および社会的衛生／社会衛生の基本概念と基本要素 ／栄養のコントロール，水道設備，汚水・ゴミ処理／ケア施設，病院 生命論 人間の乳児期，青少年期，成熟期，全盛期および老年期／栄養の衛生，衣服，住居，労働 人間の個体発生 卵子，精子，受精／初期の発育段階／胚膜／外形／腸とその派生物／神経系と感覚器官／出産	B 80

A：現代語コース，B：数学・自然科学コース，C：古典語コース

を超え出るものであったし，他方では，教授プランが求めるものがまだほとんどはっきりしていなかった．そこで教授プランの改訂では，以下の視点が重視された．すなわち，①教材が相互に意味あるように調整されていること，②教材の過重負担をなくすこと，③早期化をやめること（Dietrich/Kummer 1979: 406），である．そしてファシズムと軍国主義のイデオロギーと一線を画すことと同時に，生徒に進歩的・民主主義的思想と基本的な教養を伝達することが重要であった．1947年の生物の教授プランではこう書かれている．

生命論としての生物は真の人間性への教育の卓越した手段である。そのためには、生徒に、構造設計の法則、生物の機能と発達を理解することができるようさせる知識を伝達することが必要である。(……)

人間の解剖学と生理学の領域における認識は、生徒を、人民の健康の維持の重要な手段として、理性的な衛生行動へと指導する。

少なからず重要なのは、生物の授業が、応用的な植物学・動物学の問題や経済的関連の問題を教授することを通じて追及する実践的な目標である。

そこには、美的・倫理的目標、自然保護思想を入念に育むことによって自然美に対する感覚と故郷に対する愛を覚醒することも入る。最後に、生徒には生命の究極的な問題について自主的に考えることができるようにする。それには、生徒は、すべての生き物の系統進化の発展に関する十分に基本的な知識にもとづかねばならない。さらには、なお数時間、教員が国民社会主義の誤った学説について生徒を啓発すること、すなわち、ダーウィンの生存闘争の学説は動植物間の関係でのみ正当化されうが、しかし個々の人間、人間グループ、人民間の戦争の対決の根拠としては正当化されえないことについて啓発することは、適切であろう(……)(Dietrich/Kummer 1979: 406 より)。

しかし、この改訂教授プランの中心にあったのは、生物学的な個々の事象に関する知識の獲得であった。

第 2 節 1950 年代前半の教授プランの変遷

1949 年 10 月に DDR がドイツ連邦共和国 (BRD) に対抗して建国され、「ドイツ民主共和国憲法」(10 月 9 日) が公布されて、社会主義建設が進められることになる。これに沿って、50 年代にはこれまでの民主主義学校から社会主義学校への急速な転換が模索されることになり、それに伴って教授プランも何度も改訂され、それをめぐって激しい議論が巻き起こされることになる。

1. 1951 年教授プランについて

1951 年に基礎学校、上級学校、10 年制学校の生物に関する教授プランが相次いで出される(表 1 参照)。Dietrich/Kummer (1979: 410-411) によると、基礎学校の生物教授プラン(④: Ministerium für Volksbildung der DDR 1951a)は上級学校の生物教授プラン(9～12 学年)(③: Ministerium für Volksbildung der DDR 1951b)と調整されると同時に、10 年制学校の生物教授プラン(②: Ministerium für Volksbildung der DDR 1951c)とも調整されることになった。基礎学校の教授プランでは、「人間学」は 5～8 学年に配置されているが、生殖と個体発生的発達はこれまでと同じように相変わらず排除され、「生殖」概念すら教材領域「脊椎動物」や「節足動物」でも出てきていない(Tille 1992b: 384)。後 2 者の教授プランでは、10 年制学校

では10学年、上級学校では11学年で「人間の解剖学と生理学」の領域で「人間の個体発生的発達」が扱われることになっている²。

(1) 生物の授業の目標

この②③の生物教授プランでは、生物の授業の任務と目標はほぼ共通している。ここでは10年制学校のものを中心に見ると(②: Ministerium für Volksbildung der DDR 1951c: 3-4)、まずその任務と目標が①「知的教育」、②「総合技術教育」、③「倫理教育」、④「能力・技能の発達」の4つの視点から挙げられ、より社会主義の視点が強調されているのが特徴的である。

①の「知的教育」では「知識」として、「植物と動物の体系性の知識、発生学にとって最も重要な科(Familien)のうちのもっとも重要な代表者の知識」、「植物と動物の形態学、生理学および生態学の知識」、「人間の解剖学と生理学の知識」、「人間の由来に関する理論を含めた進化論の知識」の獲得が目指されており、「認識」としては、「生物は構造と生命機能において物質的であることの認識」、「生物の発展と生命機能は弁証法的合法則性にしたがって行われることの認識」、「世界は原理的に認識できることの確信」、「人間は、自然を自分の欲求の充足のために改造することができることの認識」が挙げられている。

②では、社会主義農業経済の発展という見地から、「生徒に現代的な農業生物学の作業方法を理解させ、生徒にこの科学部門の基本的知識を伝えるという任務」が協調されるとともに、「農業経済の生産過程にとって重要である基本的な能力と技能」の育成が目指されている。Dietrich/Kummer (1979: 410-411)によると、1951年から1958年まで、1951年の生物教授プランは何度も改訂され補筆され詳細にされていくが、その際急速に発展した社会主義農業が、とくに生物の授業に刺激を及ぼしたという。

③の倫理教育との関連では、「労働の準備と実施の際の粘り強さと責任」、「小さいものや繊細なものを扱う労働の際の精確さと慎重さ」、「観察結果を評価利用する際の正直さと批判的態度」を育成するとしている。

④では、「弁証法的に考える能力」、「獲得した知識と認識を実践に応用する能力」、「観察して諸感覚器官を目的に合わせて用いる能力」、「簡単な生物学的実験を行う技能」、「庭で、植物の栽培および収穫を期待して単純な労働を行う能力」、「事故の際に応急処置する能力」の獲得が目標として挙げられている。

その上で、他の授業と同様に、生物の授業でも、「科学的認識がいかに歪められ人間の生命の抹殺のために濫用されているか(例えば人種の誹謗、細菌戦争)、およびこれと反対にいかに関し知識が進歩的な社会秩序では住民の生活水準の向上に奉仕しているかを示す」としている(4)。

(2) 10学年の教材プラン

10学年の生物の授業は「人間の解剖学と生理学」と「一般生物学」からなり、表3のように構成されている(②: Ministerium für Volksbildung der DDR 1951c: 11-15)。

表 3 10 学年の生物教材プラン

教材	時間数	教材	時間数
人間の解剖学と生理学		D. 生殖器	2
A. 人間の身体の運動系統		E. 内分泌, ホルモン	4
I. 骨格	3	F. 人間の個体発生的発達	8
1. 骨の構造と成分		1. 予備发育 2. 胚の发育	
2. 骨格と関節の分枝と機能		3. 諸器官の发育	
3. 骨格と関節の发育障害と病気		G. 刺激受容; 興奮の伝導と処理	
II. 筋肉組織	6	I. 刺激の受容	6
1. 筋肉の構造		1. 目 2. 聴覚器官と平衡器官	
2. 骨格筋の概観 筋肉の機能		3. 嗅覚・味覚器官	
3. 病気とケア		4. 感覚器官としての皮膚	
B. 皮膚・角質の形成		II. 興奮伝導と興奮処理	9
1. 皮膚の構造と機能		1. 末梢神経系 2. 中枢神経系	
2. 皮膚腺		3. 植物性・自律神経系	
3. 皮膚の角質形成		H. 自然と社会における人間の地位	3
4. 皮膚の病気とケア		1. 人間と動物との一致と相違	
C. 新陳代謝の器官系	9	2. 人間の生物学的な固有性	
I. 血液循環とその器官		3. 自然の支配者としての人間	
1. 血液とその機能		一般生物学	
a) 血液の成分		A. 地球における生命の発生と人間に至るまでの生命の発達	
b) 血液の生物学的防衛反応		I. 地球における生命の発生	3
c) 血液の病気		1. 炭化水素から原始生物へ	
2. 血液の循環		2. 生命の特徴	
a) 心臓 b) 循環血管		3. 生命発生の誤った解釈	
c) 循環障害 d) リンパ液の循環		II. 種の発達; 進化論の証明	9
II. 呼吸	3	III. 人間の由来と発展	6
1. 肺呼吸 2. 呼吸器の病気とケア		B. 人間による諸生物のさらなる創造的な発展	
III. 栄養摂取と消化	10	I. 育種の理論的基礎	5
1. 食物と栄養素, 水分と塩分の補給		1. 生物の発達とその環境への依存	
2. ビタミン		2. 獲得した性質の遺伝	
3. 実際の消化過程		II. 新しい植物育種	6
a) 口での消化		1. 植物育種の目標	
b) 胃での消化		2. 植物育種の方法	
c) 小腸での消化		III. 新しい動物育種	4
d) 大腸での消化		1. 動物育種の目標	
4. 消化器官の病気とケア		2. 動物育種の方法	
IV. 排泄器官	2	C. 人間による自然の改造——一つの社会的要求	2
1. 腎臓の構造と機能		復習, 卒業試験の準備と実施	20
2. 尿形成と尿排泄			120
3. 尿道の病気			

そのうちの性教育に関する教材を見ると、次のことを取り扱うとしている。

D. 生殖器	生殖器, 性病(淋病, 梅毒, 下疳)とその撲滅, 国民の健康にとっての危険, 性病蔓延の社会的制約
F. 人間の個体発生的発達	
1. 予備发育	精子の发育, 女性の生殖細胞, 黄体の发育, 月経サイクル, 受精と卵子の移送
2. 胚の发育	原腸形成, 胎盤の发育
3. 諸器官の发育	身体の外形の发育, 系統進化の段階をとくに考慮しての外胚, 内胚葉, 中胚葉の諸器官の发育

この教材プランを 1946 年生物教授プランと比較すると、時間数は大幅に増えているものの、「生命論」がなくなり、「衛生」が「D. 生殖器」に組み込まれている。また、「D. 生殖器」と

「人間の個体発生的発達」の部分で、合計10時間があてられ、前者では生殖器と性病が取り上げられ、後者では受精と胚の発育がメインとなり、出産の項目が消えている。このように、51年プランでは性に関する部分が、46年プランに比べて減っていることがわかる。さらに、この教授プランでは、「H. 自然と社会における人間の地位」が独立した項目として取り上げられて、自然の支配者としての人間の地位が強調されるとともに、「一般生物学」が取り上げられて、生命の発生と進化論、人間による自然の改造が論じられている。

(3) 上級学校 11 学年生物教授プランについて

上級学校 11 学年の生物教授プラン (③) は、数学・自然科学のクラス B と言語系クラスの A・C では時間数が異なるだけで (B120 時間、A・C80 時間)、内容はほぼ同じである。ここでは A と C のクラスのものを挙げておく (表 4)。

上級学校のプランは 10 年制学校のプランと内容や構成はほぼ同じである。ただし、大きく異なるのは、第 1 に、10 年制学校の 10 学年で取り上げられていた「人間の解剖学と生理学」が、

表 4 11 学年 (A, C) 生物の教授プラン

教材	時間数	教材	時間数
人間の解剖学と生理学			
A. 人間の身体の運動系統			
I. 骨格	4	2. 水分と塩分の補給	
1. 骨の構造と成分		3. ビタミン	
2. 骨格と関節の分枝と機能		4. 実際の消化過程	
3. 骨格と関節の発育障害と病気		a) 口での消化 b) 胃での消化	
II. 筋肉組織	6	c) 小腸での消化 d) 大腸での消化	
1. 筋肉の構造		5. 消化器官の病気とケア	
2. 筋肉の機能		V. 排泄器官	3
3. 病気とケア		1. 腎臓の構造と機能	
B. 皮膚・角質の形成	3	2. 尿形成と尿排泄	
1. 皮膚の構造と機能		3. 尿道の病気	
2. 皮膚腺と皮膚の角質形成		D. 生殖器	2
3. 皮膚の病気とケア		E. 人間の個体発生的発達	8
C. 新陳代謝系		1. 予備発育と胚の発育	
I. 生きた生物の特徴としての新陳代謝	1	2. 諸器官の発育	
II. 血液循環とその器官	12	F. 内分泌 ホルモン	5
1. 血液とその機能		G. 刺激受容; 興奮の伝導と処理	
a) 血液の成分		I. 刺激の受容	6
b) 血液の生物学的防衛反応		1. 目	
c) 血液の病気		2. 聴覚器官と平衡器官	
2. 血液の循環		3. 嗅覚と味覚	
a) 心臓 b) 循環血管		4. 感覚器官としての皮膚	
c) 循環障害 d) リンパ液の循環		II. 興奮伝導と興奮処理	8
III. 呼吸	6	1. 末梢神経系	
1. 細胞内の事象		2. 中枢神経系	
2. 肺呼吸		3. 植物性・自律神経系	
3. 呼吸器の病気とケア		H. 自然と社会における人間の地位	2
IV. 栄養摂取と消化	10	1. 人間と動物との一致と相違	
1. 食物と栄養素		2. 人間の生物学的な固有性	
2. 水分と塩分の補給		3. 自然の支配者としての人間	
		復習, 卒業試験の準備と実施	4
			80

Ministerium für Volksbildung 1951b: 37-41 より作成

上級学校では 11 学年で取り扱われていることである。そのうち、性に関する部分の「生殖器」には、B コースで計 18 時間、A・C コースで 10 時間あてられている。また「人間の個体発生的発達」の構成が 3 つから 2 つにまとめられている。第 2 に、「一般生物学」は 12 学年に移されて、それが 1 年間教えられることになっている（B コース 90 時間、A と C コース 60 時間）。

2. 1953 年上級学校生物教授プランと 1954 年上級学校生物教授プラン

その後、上級学校の生物教授プランは 1953 年 (⑦)、1954 年 (⑨) と改訂されていく。ここでは 1951 年の生物教授プラン (③) と比較しながら、1953 年と 1954 年の生物教授プランの特徴を見ておく。

(1) 1951 ～ 1954 年生物教授プランの比較

まず 1951 年、1953 年、1954 年の 11 学年生物教授プランの言語系 A・C コース用の「人間の解剖学と生理学」の構成を、比較してみよう (表 5)。

まず全体の構成から見ると、51 年プランと比べて変化している点としては、第 1 に、51 年プランにあった「H. 自然と社会における人間の地位」が 1953・54 年プランでは削除されている。第 2 に、「人間の解剖学と生理学」の構成にはさほど大きな変化は見られないものの、「D. 生殖器」と「排泄器官」がまとめられて、「D. 泌尿生殖器系」とされ、「G. 刺激受容、興奮の伝導と処理」が「G. 感覚器官と神経系」に変えられている。第 3 に、53 年プランと 54 年プランを比較してみると、前者では「D. 泌尿生殖器系」のあとに「E. 人間の個体発生的発達」が続いているのに、後者のプランでは生殖器と切り離されて扱われているという違いがみられる。

(2) 性教育に関する部分の比較

次に、性教育に関する部分である「生殖器」、「泌尿生殖器」と「人間の個体発生的発達」の構成を比較してみる (表 6)。

これを見るとわかるように、まず第 1 に、53・54 年プランでは時間数が減っている。第 2 に、「生殖器」に関する部分は大きくは変わっていないが、「月経サイクル」が付け加えられている。第 3 に、「人間の個体発生的発達」の部分で 51 年プランと 53・54 年プランを比較すると、51 年プランでは扱われていなかったものが出てくる。それは、「双生児の形成」「胎児の発育」であり、「出産」が再び取り扱われようになっている。

第 3 節 1955・56 年生物教授プラン案とそれをめぐる論争

その後、55 年から 56 年にかけての時期には、学校改革とそれをめぐる構想が目まぐるしく変化する。1955 年 5 月 11 日の「上級学校の 10 年制学校への変更に関する人民教育省の指令 (Anordnung des Ministerium für Volksbildung über die Umwandlung von Oberschule in

表5 1950年代前半の生物教授プランの比較 (11学年)

1951年	1953	1954
人間の解剖学と生理学	人間の解剖学と生理学	人間の解剖学と生理学
A. 人間の身体の運動系統	A. 人間の身体の運動系統	A. 人間の身体の運動系統 8
I. 骨格 4	I. 骨格 3	I. 骨格
1. 骨の構造と成分	1. 骨の構造と成分	1. 骨の構造と成分
2. 骨格と関節の分枝と機能	2. 骨格と関節の分枝と機能	2. 骨格と関節の構成と機能
3. 骨格と関節の発育障害と病気	3. 骨格と関節の発育障害と病気	3. 骨格と関節の発育障害と病気
II. 筋肉組織 6	II. 筋肉組織 4	II. 筋肉組織
1. 筋肉の構造	1. 筋肉の構造と機能	1. 筋肉の構造と機能
2. 筋肉の機能	2. 骨格筋の概観	2. 骨格筋の概観
3. 病気とケア	3. 筋肉の病気とケア	3. 筋肉の病気とケア
B. 皮膚・角質の形成 3	復習 1	B. 皮膚系 2
1. 皮膚の構造と機能	B. 皮膚系 2	1. 皮膚の構造と機能
2. 皮膚腺と皮膚の角質形成	1. 皮膚の構造と機能	2. 皮膚の病気とケア
3. 病気とケア	2. 皮膚の病気とケア	C. 新陳代謝系 22
C. 新陳代謝系	C. 新陳代謝系	I. すべての生きた物質の基本的性質としての新陳代謝
I. 生きた生物の特徴としての新陳代謝 1	I. すべての生きた物質の基本的性質としての新陳代謝 1	II. 栄養
II. 血液循環とその器官 12	II. 栄養 8	1. 食物、栄養素とビタミン
1. 血液とその機能	1. 食物、栄養素とビタミン	2. 排泄器官と排泄事象
a) 血液の成分	2. 排泄器官と排泄事象	3. 排泄器官の病気とケア
b) 血液の生物学的防衛反応	3. 排泄器官の病気とケア	III. 呼吸
c) 血液の病気	復習 1	1. 呼吸器官の構造と機能
2. 血液の循環	III. 呼吸 3	2. 呼吸器の病気とケア
a) 心臓 b) 循環血管	1. 呼吸器官の構造と機能	IV. 血液・リンパ循環系
c) 循環障害	2. 呼吸器官の病気とケア	1. 血液とその機能
d) リンパ液の循環	IV. 血液・リンパ循環系 8	2. 心臓と循環血管
III. 呼吸 6	1. 血液とその機能	3. リンパとリンパ脈管系
1. 細胞内の事象	2. 心臓と循環血管	D. 泌尿生殖器系 5
2. 肺呼吸	3. リンパとリンパ脈管系	I. 泌尿器
3. 呼吸器の病気とケア	復習 1	1. 腎臓の構造と機能
IV. 栄養摂取と消化 10	D. 泌尿生殖器 2	2. 尿の形成と尿排泄
1. 食物と栄養素	I. 泌尿器 2	3. 尿器の病気
2. 水分と塩分の補給	1. 腎臓の構造と機能	II. 生殖器
3. ビタミン	2. 尿の形成と尿排泄	E. 内分泌 3
4. 実際の消化過程	3. 尿道の病気	F. 感覚器官と神経系 15
a) 口での消化	II. 生殖器 2	I. 感覚器官
b) 胃での消化	復習 1	II. 神経系
c) 小腸での消化	E. 人間の個体発生的発達 4	G. 人間の個体発生的発達 5
d) 大腸での消化	I. 受精と胚の初期発育	I. 受精と胚の初期発育
5. 消化器官の病気とケア	II. 胚葉の形成後の胎児の発育	II. 胚葉の形成後の胎児の発育
V. 排泄器官 3	復習 1	H. 全体の復習 8
1. 腎臓の構造と機能	F. 内分泌 3	計 68
2. 尿の形成と尿排泄	G. 感覚器官と神経系	
3. 尿道の病気	I. 感覚器官 5	
D. 生殖器 2	II. 神経系 8	
E. 人間の個体発生的発達 8	復習 2	
1. 予備発育と胚の発育	学年教材の復習 8	
2. 諸器官の発育	計 68	
F. 内分泌 ホルモン 5		
G. 刺激受容, 興奮の伝導と処理		
I. 刺激の受容 6		
1. 目		
2. 聴覚器官と平衡器官		
3. 嗅覚と味覚		
4. 感覚器官としての皮膚		
II. 興奮伝導と興奮処理 8		
1. 末梢神経系		
2. 中枢神経系		
3. 植物性・自律神経系		
H. 自然と社会における人間の地位 2		
1. 人間と動物との一致と相違		
2. 人間の生物学的な固有性		
3. 自然の支配者としての人間		
復習と中間試験 4		
計 80		

Ministerium für Volksbildung 1951b; 1953; 1954 より作成

表 6 50 年代前半生物教授プランにおける性教育部分の比較 (11 学年)

1951 年	10 時間	1953 年	7 時間	1954 年	8 時間
D. 生殖器 生殖器 性病 (淋病, 梅毒, 下疳) とその撲滅 国民の健康にとっての危険. 性病の蔓延の社会的制約	2	D. 泌尿生殖器系 II. 生殖器 女性生殖器; 卵胞の发育, <u>月経サイクル</u> . 男性生殖器; 性病 (淋病, 梅毒, 下疳) とその撲滅. 国民の健康にとっての危険. 性病蔓延の社会的制約.	2	D. 泌尿生殖器系 II. 生殖器 女性生殖器; 卵胞の发育, <u>月経サイクル</u> . 男性生殖器 性病 (淋病, 梅毒, 下疳) とその撲滅. 国民の健康にとっての危険. 性病蔓延の社会的制約.	3
E. 人間の個体発生的発達 1. 予備发育と胚の发育 精細胞 (Samenzelle) の发育. 女性の生殖細胞, 黄体の发育, 受精と卵子の移送, 原腸形成, 胎盤の发育. 2. 諸器官の发育 身体の外形の发育. 系統進化の段階をとくに考慮しての外胚葉, 内胚葉, 中胚葉の諸器官の发育.	8	E. 人間の個体発生的発達 I. 受精と胚の初期发育 男性の生殖細胞と女性のそれ. 卵細胞の受精, 卵割, 胚葉形成, 胎盤の发育. 双生児の形成. II. 胚葉の形成後の胎児の发育 身体の外形の发育. 進化論の特徴を考慮しての胚葉からの諸器官の发育. 出産 復習	4 1	G. 人間の個体発生的発達 I. 受精と胚の初期发育 男性の生殖細胞と女性の生殖細胞, 卵細胞の受精, 卵割, 胚葉形成, 胎盤の发育. 双生児の形成. II. 胚葉の形成後の胎児の发育 身体の外形の发育. 進化論の特徴を考慮しての胚葉からの諸器官の发育. 出産.	5

Zehnklassenschule)」(MONUMENTA PAEDAGOGICA 1970: 512-513) で従来の 8 年制基礎学校を 2 年延長して, 9 月 1 日までに 10 年制学校に改革することが決められ, 同年 8 月には 10 年制学校が「中等学校 (Mittelschule)」と名づけられた. また, この指令では, 1956 年 6 月 1 日までに人民教育省が 10 学年用の新たな教授プランを出す とされた. そして, 「DDR における中等学校の任務と建設に関する閣議決定 (Beschuß über die Aufgaben und der Aufbau der Mittelschule in der Deutschen Demokratischen Republik)」(MONUMENTA PAEDAGOGICA 1969: 23-27) が 1956 年 3 月 15 日に出されて, 中等学校は, 社会主義建設を目指す社会主義学校, すなわち 10 年制の普通教育総合技術学校へ転換されることになる (深谷 1963; 1966b).

そこでは, 「わが共和国を一層強化し守り, 将来の統一した民主的なドイツを建設する闘争と平和の維持に参加する人間, 「熱烈な愛国者でありソ連のまごうことなき友人」が目指されている. それが, 「高い社会主義的意識を持ち, 確固とした応用しうる科学技術の知識をものにし, その心身の諸力を全面的に発達させた人格」だとされている. また, とくに自然科学の授業において, 「生徒は, 自然と人間社会の法則の知識と意識的な応用が人間に, 自然と社会を改造し, すなわち世界を変革し社会主義を建設することができるようにさせることを学ばねばならない」ことが強調されている.

1. 1955・56 年生物教授プラン案

人民教育省指令に先立つ 1955 年 3 月に, ドイツ教育中央研究所 (Deutsches Pädagogisches Zentralinstitut: DPZI) が基礎学校における生物教授プランの基本構想案 (5〜8 学年) を出した (Deutsches Pädagogisches Zentralinstitut 1955). これに対する Rothmaler の DPZI への手紙 (Rothmaler 1955a) をきっかけに, 雑誌 BioS 編集部は旧教授プランの欠陥をめぐって討

論を呼びかけ、BioS誌上で討論が行なわれていく。ここで提起された基本構想案の主要構成は以下のようなものであった（BioS 1955, Heft 5: 222）。

表7 基礎学校生物教授プランの基本構想案（5～8学年）

5 学年：動物学 導入—脊椎動物
6 学年：植物学 導入—野生植物
7 学年：栽培植物の育種
動物学：単細胞—生物の自然的体系
8 学年：人間の解剖学と生理学：支持・運動系—皮膚—神経系と感覚器官—消化・排泄器官—呼吸器官—血液循環器官—内分泌腺—人間の個体発生の発達
人間の健康維持：個人の衛生—感染病とその撲滅—ドイツ民主共和国の保健制度
進化論：

この教授プラン案では、8 学年で「人間の解剖学と生理学」を取り扱うととされた。これに対してその後討論が繰り広げられ、それを受けたかたちで 1955 年 11 月 24・25 日に開かれた DPZI の生物常務委員会（die Ständige Kommission für Biologie）で集中討議され、1956 年に「基礎学校における生物の新たな教授プランの基本構想（Die Grundkonzeption des neuen Lehrplan für den Biologieunterricht in der Grundschule）」（BioS 1956, Heft 2: 40-54）として出されることになる。

また、それと並行して、「10 年制中等学校生物の授業用教授プランの基本構想案（5～10 学年）（Entwurf einer Grundkonzeption zum Lehrplan für den Biologieunterricht der zehnklassigen Mittelschule (Klassen 5 bis 10)）」も出され、討論に付される（Kühn 1956b 所収）。この基本構想案では、人間の個体発生は 9 学年で扱われており、以下のような 9 学年教授プランが提示されていた（ibid.: 244）。

表8 9 学年生物教授プラン案

9 学年	
A. 人間の解剖学と生理学 支持・運動系，皮膚，栄養，呼吸，血液・リンパ循環，泌尿生殖器系，内分泌，神経系，個体発生	35 時間
B. 人間の健康維持	9 時間
C. その相互作用と環境条件における植物と動物	16 時間

2. 1955・56 年生物教授プラン案をめぐる論争と 1957 年プラン

では、この移行期の議論ではどのようなことが問題になったのであろうか。1955 年 10 月までの討論の状況については、Krasse (1956) が総括している。この総括でとくに注意すべきは、憲法 37 条の学校と親の教育に関する使命、「普通教育学校の活動改善の法令（Verordnung zur Verbesserung der Arbeit der allgemeinbildenden Schulen）」（1954 年 3 月 4 日）、ドイツ社会主義統一党（以下、SED）第 21 回中央委員会の決議、そしてとくに人民教育省大臣 Fritz Lange の論文「ドイツ民主学校とその新たな任務（Die deutsche demokratische Schule und

ihre neuen Aufgaben)』(*Neues Deutschland*, 26. Mai 1955, Ausgabe B. Nr.121)にもとづいて、生物の授業の特別な目標として、次の4つが挙げられていることである。すなわち、生物の授業では、①総合技術教育をこれまで以上に考慮すること、②すべての子どもに郷土愛を育成すること、③従来の教授プランの詰め込み主義をなくすこと、④これまで以上に、教材選択の際に年齢に制約された心理学的状況を個々の学年段階で考慮すること、である。

このKrasseの総括をも参考にしながら、この間のとくに性教育に関わる討論の状況をまとめると、大きな争点は、基礎学校の「基本構想案」に対して8学年で「人間の個体発生」と「性病」を取り扱うべきだという意見をめぐって出されている。ここでは、そもそも基礎学校でこのテーマを取り上げるべきか否か、取り上げるとしたらどの学年において取り扱うべきなのかという問題が議論されている。2つ目は、そのテーマを扱うとして誰が行うのか、医者なのか生物の教員なのかという担い手の問題である。3つ目は、どういう教授形態・教授方法で行うのか、具体的にいえば、男女共習で行うのがいいのか、それとも別習で行うのがいいのかという問題である。

まず1番目の問題についてみると、Rothmaler (1955b) は7学年で哺乳類に関して得られた知識をもとに人間と衛生を扱い、そこで生殖について触れることを提案している。Pieetsch (1955) も Rothmaler と同じような教授プラン案を作成しているが、8学年で「人間の解剖学、生理学および衛生」を扱うことにしている。また Mühlhausen 教育学研究所の所長である Fischer (1956: 425) は、生徒が8学年で学校を去っていくという現状から、6～9学年の人間のテーマを8学年で完結した編として取り扱うことを提案している。これに対して、Tille (1955) は、望んだ成果が期待できないので、「人間の個体発生」と「性病」を8学年の生物の授業で扱うべきではないと主張している。

そして最終的には、先の生物常務委員会で、①何人かの会議参加者は、生徒に彼らの生活にとって著しく重要な問題を基礎学校卒業の前に知らせることが必要だとして、生物の授業外で(適切な教員あるいは学校医が)生徒に教えることを望んだが、性病は基礎学校の生物の授業に採り入れないこと、②「人間の個体発生的発達」についても、8学年における生徒の異なる身体的および心理的成熟を考慮して、「人間の解剖学、生理学および衛生」は扱うが、「人間の個体発生的発達」は基礎学校における生物の授業のテーマには採り入れるべきではないということになった (Kühn 1956a: 102)。

2番目の担い手の問題については、Meyerhoff (1955: 272) は、生殖と胚の発育の問題について教員が教えるのが基本で、追加として学校医が講演するという形を考えている。Krasse (1956: 10) も、性教育は例外のケースでのみ学校外の人物に委ねるべきだとしている。

3つ目の問題については、BioS誌上では具体的な議論を見ることができない。ただ別稿(池谷 2011a)で考察したように、この時期には男女共学や男女同席に対してもかなり反対論が出されていた。

こうした議論を経て、1956年7月1日付で『中等学校生物10学年教授プラン』(⑩:

Ministerium für Volksbildung 1956) が出され、「人間の解剖学と生理学」は10学年で扱われることになった。ただし、その内容と構成は以下のように、これまでとは大きく変更されており、56年基本構想案にあった「個体発生」も消えてしまっている(表9)。

さらに、この教授プランも翌1957年にはまた改訂される(Ⅺ: Ministerium für Volksbildung 1957)。A、Bの項目はほとんど変更されていないが、Cの項目以降が大幅に変えられている(表10)。

表9 中等学校生物10学年教授プラン

教材	時間数	教材	時間数
A. 学校庭園での収穫作業	18	D. 動植物の育種	20
B. 人間の解剖学と生理学	26	I. 動植物育種の歴史について	
1. 新陳代謝器官と新陳代謝	(9)	II. 植物育種の課題と目標	
a) 栄養 b) 呼吸		III. 動植物育種の基礎と方法	
c) 血液とリンパの循環		1. 育種の基礎	(4)
2. 内分泌	(2)	a) 生物の個体的発育の合法則性	
3. 感覚器官と神経系	(9)	b) 育種の基礎としての種の変異性	
a) 感覚器官 b) 神経系		c) 生物の発達の意識的操作への取り組み	
4. 人間の健康維持	(6)	2. 植物育種	(8)
a) 個人の衛生 b) 感染症とその撲滅		a) 植物育種の方法	
c) DDRにおける保健制度		b) DDRにおける植物育種	
C. 動物学	19	3. 動物育種	(7)
1. 動物の比較解剖学・生理学	15	a) 動物育種の方法	
a) 身体とその強度	(4)	b) DDRにおける動物育種	
b) 呼吸器官と呼吸	(4)	E. 遺伝学説の発展について	7
c) 血液循環器官とその機能	(3)	I. ミチューリン生物学の基本認識	
d) 神経系	(4)	II. 遺伝の染色体論	
II. 動物の生殖と胚の発育	4		
1. 無性生殖 2. 有性生殖			
3. 胚の発育			

Ministerium für Volksbildung 1956: S. 4-13 より作成。

表10 1957年生物教授プラン(10学年)

教材	時間数	教材	時間数
A. 学校庭園での収穫作業	12	III. 動植物育種の基礎と方法	
B. 人間の解剖学と生理学	26	1. 育種の基礎	
I. 新陳代謝器官と新陳代謝	(10)	a) 生物の個体的発達の合法則性	(3)
1. 栄養 2. 呼吸		b) 育種の基礎としての種の変異性	
3. 血液とリンパの循環		c) 生物の意識的操作への取り組み	
II. 内分泌	(2)	2. 植物育種	(7)
III. 感覚器官と神経系	(8)	a) 植物育種の方法	(5)
1. 感覚器官 2. 神経系		b) DDRにおける植物育種	
IV. 人間の健康維持	(6)	3. 動物育種	
1. 個人の衛生 2. 感染症とその撲滅		a) 動物育種の方法	
3. DDRにおける保健制度		b) DDRにおける動物育種	
C. 動植物の育種	16	D. 遺伝学説の発展について	6
I. 動植物育種の歴史について	I・IIで	I. ミチューリン生物学の基本認識	
II. 課題と目標	1時間	II. 遺伝の染色体論	

Ministerium für Volksbildung 1957: S. 10-15 より作成。

次に、この 1957 年教授プランを 1954 年のそれと比較してみよう（表 11）。これを見ると、1956・57 年の中等学校 10 年生の生物教授プランでは、1954 年プランと比べると、全体的に「人間の解剖学と生理学」は縮小され、受精、胎児の発育、出産など生殖と個体発生に関する事柄はまったく消え去っている。この点では、1956・57 年教授プランは 50 年代前半の教授プランより後退していると言えよう。そのかわりに、動植物育種と遺伝学説に時間が割かれている。その理由は、第 1 に、1957 年教授プランの「まえがき」に書かれているように、この学年の教授プランは「現代の高度に発達した農業の必要に適い、生徒を農業生産の基礎に習熟させる」こと、そのことによって「総合技術陶冶・訓育」に重要な貢献をすることを最重要・最優先課題としている。

表 11 1954 年プランと 1957 年プランの比較

1954 年 11 学年	時間数	1957 年 10 学年	時間数
人間の解剖学と生理学		A. 学校庭園での収穫作業	12
A. 人間の身体の運動系統	8	B. 人間の解剖学と生理学	26
I. 骨格		I. 新陳代謝器官と新陳代謝	(10)
1. 骨の構造と成分		1. 栄養 2. 呼吸	
2. 骨格と関節の分枝と機能		3. 血液とリンパの循環	
3. 骨格と関節の発育障害と病気		II. 内分泌	(2)
II. 筋肉組織		III. 感覚器官と神経系	(8)
1. 筋肉の構造と機能		1. 感覚器官 2. 神経系	
2. 骨格筋の概観 3. 筋肉の病気とケア	2	IV. 人間の健康維持	(6)
B. 皮膚系		1. 個人の衛生 2. 感染症とその撲滅	
1. 皮膚の構造と機能		3. DDR における保健制度	
2. 皮膚の病気とケア		C. 動植物の育種	16
C. 新陳代謝系	22	I. 動植物育種の歴史について	I・II で
I. すべての生きた物質の基本的性質としての新陳代謝		II. 課題と目標	1 時間
II. 栄養		III. 動植物育種の基礎と方法	
1. 食物、栄養素とビタミン		1. 育種の基礎	
2. 排泄器官と排泄事象		a) 生物の個体の発達の合法則性	(3)
3. 排泄器官の病気とケア		b) 育種の基礎としての種の変異性	
III. 呼吸		c) 生物の意志的操作への取り組み	
1. 呼吸器官の構造と機能		2. 植物育種	
2. 呼吸器の病気とケア		a) 植物育種の方法	(7)
IV. 血液・リンパ循環系		b) DDR における植物育種	
1. 血液とその機能		3. 動物育種	
2. 心臓と循環血管		a) 動物育種の方法	(5)
3. リンパとリンパ脈管系		b) DDR における動物育種	
D. 泌尿生殖系	5	D. 遺伝学説の発展について	6
I. 泌尿器		I. ミチューリン生物学の基本認識	
1. 腎臓の構造と機能		II. 遺伝の染色体論	
2. 尿の形成と尿排泄 3. 尿器の病気			
II. 生殖器			
E. 内分泌	3		
F. 感覚器官と神経系	15		
I. 感覚器官			
II. 神経系			
G. 人間の個体発生的発達	5		
I. 受精と胚の初期発育			
II. 胚葉の形成後の胎児の発育			
H. 全体の復習	8		
	68		

Ministerium für Volksbildung 1954; 1957 より作成。

るからである。第2の理由は、生物の授業を通して世界観的教育を育成することのほうを重視しているからである (Ministerium für Volksbildung 1957: 3)。

もっとも、10 学年の生徒は、生殖・受精や性に関わる部分を含んでいる教科書『人間学』 (Lehrbuch der Biologie für das elfte Schuljahr. Anthropologie. これについては後述) を使用してもよいとされている。しかし、すぐに「中等学校の9 学年と10 学年の生物の授業では、これらの教科書 (9 学年の生物教科書『植物学』, 11 学年の『人間学』, 12 学年の生物授業用の教授ノート (Lehrheft) 『動植物育種』——引用者) に含まれている教材の選ばれたものだけが取り扱われることに注意しなければならない」(4-5) と釘を刺している。

3. 11 学年用生物教科書『人間学』

ではこの期間に使用されていた11 学年用の生物教科書『人間学』(1951 年から1959 年まで使用) では、生殖器や人間の個体発生的発達はどうに取り扱われ論じられていたのであろうか。ここでは1954 年版のものを見てみよう (1954 年版は1952 年版と図や写真が若干異なるものの内容は同じである)。まず、その構成は以下のようになっている³。

表 12 教科書『人間学』の構成

<p>A. はじめに I. 解剖学と生理学の課題と意義 II. 諸器官と器官系 B. 人間身体の運動系 C. 皮膚器官 D. 新陳代謝 E. 泌尿生殖器系 I. 泌尿器 II. 生殖器 a) 女性生殖器 b) 男性生殖器 c) 性病</p>	<p>F. 人間の個体発生 I. 受精と胚の初期発育 II. 胚葉の形成以後の胎児の発育 III. 諸器官の形成 IV. 出産 G. 内分泌 H. 感覚器官と神経系 I. DDR における保健衛生機関</p>
--	--

「はじめに」では、「解剖学と生理学の課題と意義」が述べられている。それは、「正常な身体構造と正常な生命事象とを研究すること」であり、そのことによって「生物の健康な機能と発達をもっとも好都合にする諸条件を発見すること」にある。さらに、解剖学と生理学の研究をつうじて、「全自然の発達連鎖における一環という正確な人間観」を得て、「人間が、人間の発生に関する迷信と偏見とから解放される」(ibd.: 5) のに貢献するとされている。

生殖と人間の個体発生については、目次からわかるように、E「泌尿生殖器系」のところで生殖器と性病が扱われ、Fの「人間の個体発生」で「受精と胚の初期発育」「胚葉の形成以後の胎児の発育」「諸器官の形成」「出産」が扱われるようになっている。

Eでは、女性生殖器と男性生殖器が図付きで細かく説明されている。例えば、「女性生殖器には対の卵巣、同様に対の卵管および子宮がある。女性の胚腺・生殖腺、卵巣(図90)は、長さ約4センチ、幅2センチ、厚さ1センチの、卵形の灰青色の器官である。それは骨盤壁に隣接していて、腹壁にある腹膜襞によって固定されている」(107)といった具合にである。また、戦後

の混乱期の性病の蔓延に対応してか、性病に 2 ページが割かれているのも特徴的である。F では、受精について、「新たな生命体の発育は、人間にあっては、すべての二つの性で増殖する動植物においてと同様に受精、すなわち、男性の精子と女性の卵子との結合から始まる」(114) とだけ説明され、人間の受精の仕方（性交）は他の動植物の生殖からの類推に委ねられ、その後で生理学的な胎児の発育、出産過程が細かく説明されている。

最後に、これまでの生物教授プランの性に関する部分とこの『人間学』の内容を比較すると、前者のほうが 50 年代に次第に後退し貧困になっていくにつれて、この教科書と生物教授プランの性に関する部分の記述との落差はきわめて大きいものとなっていることがわかる。

第 4 節 1959 年の教授プラン基本構想案をめぐる論争と 1959 年教授プラン

1. 学校テーゼと 1959 年学校法

さて、その後、先の閣議決定を受けて第 5 回教育会議（1956 年 5 月 15 ～ 17 日）が開かれ、これまでの民主主義学校は本質的に社会主義的人間の教育を目指すことになった。そこでは次の 2 つの主要な任務が強調された（Aufgaben und Probleme der deutschen Pädagogik 1956: 404）。

1. 訓育労働の全面的な改善：成長期にある世代を、信念を持ち責任意識のあるわが人民民主主義国家の市民、意志の堅固な、労働意欲のある、規律・訓練され陶冶された人間、真のドイツの愛国者および進歩の闘争者に訓育すること。
2. 陶冶労働の水準の向上：全面的に陶冶され、自主的に思考でき、その知識を現代の生産と社会的生活の他の領域において、社会主義建設のために実践的かつ創造的に応用できる青少年を育成すること。

こうして、民主主義学校において人民民主主義国家の市民としての責任、愛国心と並んで、全面的に陶冶され、知識を社会主義建設に創造的に応用できる人間が目指され、愛国心教育と総合技術教育が最重要視されることになる。またこの間に提起されたさまざまな学校制度改革案をめぐって討論がなされ、最終的には SED 第 5 回党大会（1958 年 7 月）を経て、1959 年 1 月 17 日の第 4 回中央委員会総会で決議「DDR における学校制度の社会主義的発展について」（いわゆる「学校テーゼ」）が出されることになる。

この「学校テーゼ」では、すでに別稿（池谷 2011b）で触れたように、「われわれの学校的主要任務は今、学習を社会主義的現実と結びつけ、教育水準をはるかに高めて、成長期にある世代をもっと社会主義社会における生活と創造へと準備させることにある。このことは、第 5 回党大会が確認したように、われわれの学校を社会主義学校へと発展させることを求める」という基本認識のもとに、「われわれの学校は、子どもたちをすでに早い頃から社会的に有用な労働と社会

主義の建設への積極的な参加とへ準備させなければならない」(Hager 1959: 71)としている。すなわち、この「学校テーゼ」で、学校の任務として社会主義的人間の形成が目指され、その内実は、①労働に対する尊重、②生産過程・科学・技術の基本的知識の習得、③身体的労働への用意と能力の3つに置かれたのである。こうして「学校テーゼ」によって、これまでの民主主義的学校から社会主義的学校への転換がはっきりと打ち出されることになった。

その一方で、これまでの学校の欠陥が一面的に評価・批判されることになる。すなわち、「学校がなおほかに本来の生活、とりわけ生産から切り離され、生徒を最初の学年から社会的に有用な活動へと教育してこなかったこと」、「それゆえこれまでの学校はしばしば単に、生徒が実践においては使用するのが難しくできない形式的な知だけを伝達してきた」ことにあると批判される。そして、この状態を克服するために、「授業と生産労働との結合」が「社会主義教育の基本原則」(ibid.: 75)にならねばならないとされたのである。

学校が生活から切り離されている状態を克服するために、授業を生産と結びつけることが必要である。これは総合技術的陶冶によってなされる。授業と生産労働との結合は、社会主義訓育・教育の基本原則である、というのも青少年はこの結合によって直接的に社会主義の建設に参加するからである (ebd.)。

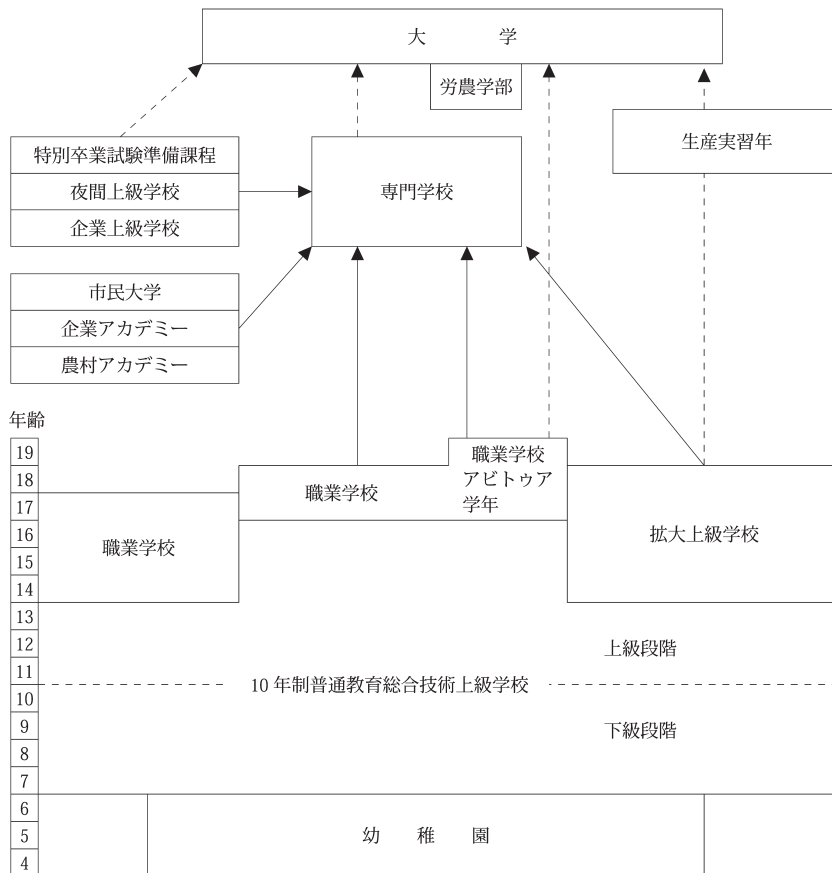
では社会主義教育の核心は何か。それは次のように、第5回党大会の線上で定義されている(74-75)。

社会主義教育とは、人格の全面的発達、連帯と集団性への訓育、労働に対する愛への訓育、戦闘的活動への訓育、高い理論的・芸術的普通教育の伝達、すべての精神的・身体的能力の展開、すなわち民族と国民の福祉(Wohl)のための社会主義的意識の形成である。

こうした理念が具体化された学校制度、それが「10年制普通教育総合技術上級学校」(ibid.: 77)である。また、それに応じて社会主義訓育の全面的な改善が必要だとして、その方向性は第5回党大会で提起された社会主義道徳・倫理の十戒にもとづかねばならない (ibid.: 91)、としている(社会主義道徳の十戒については池谷 2011b 参照)。

このテーゼはその後、全国民的討議に付され、人民教育省、SED 中央委員会、地方人民議会に集約され、1959年12月2日に「ドイツ民主共和国における学校制度の社会主義的發展に関する法律」(以下、1959年学校法)が公布されていく(小出 1978, p. 164, なお, Autorenkollektiv 1960 = 1962: 邦訳 392, 池谷 2011b 参照)。その結果、学校制度は次のようになった(図 2 Anweiler 1992: 529)。

図2 DDRの学校体系(1959)



2. 1959 年の教授プラン基本構想案

ところで、この1959年学校法が制定される前の3月に、「学校テーゼ」にもとづいて「10年制普通教育総合技術上級学校教授プランの基本構想案」(Deutsche Pädagogische Zentralinstitut 1959)が出され、討議に付された後6月20日に「10年制普通教育総合技術上級学校教授プラン」(⑫: Ministerium für Volksbildung 1959a; MONUMENTA PAEDAGOGICA 1969: 260-264)が公布され、新たな教授プランとして9月1日から発効することになる。

この教授プランでは、Wernecke (1966: 6) によれば、次のことが課題とされた。すなわち、SED 第 5 回党大会の決議にもとづいて、学校をさらに発展させるには、学校の生活からの隔離というブルジョア的學校から引き継いだ根源悪を克服して、學校と生活の緊密な結合を保証し、実践に結びついた高度の普通教育を行なうことであった。そのために導入されたのが総合技術教育である。もう 1 つの重要な課題は、とくに 1956・57 年に現われ、とりわけ生徒の業績達成能力を過少評価し、業績達成能力をほとんど求めない学校教育における修正主義の傾向を克服することにあった⁴ (ebd.).

そこで、教授プラン基本構想案では、SED 第4回中央委員会テーゼ「ドイツ民主共和国における学校制度の社会主義的發展について」やSED 第5回党大会決議にもとづいて、「最も進歩的な科学と芸術ならびに新時代の生産実践にもとづいて授業をし、授業を社会主義的生活と緊密に結びつけ、訓育・陶冶全体を社会主義發展の展望へと方向づけること」が必要であり、「総合技術訓育・陶冶，世界観訓育・陶冶，政治的・道德的訓育・陶冶，音楽訓育・陶冶および身体訓育・陶冶を，社会主義実践と緊密に結びつけて実現し，そのもとで生徒に諸科学の基礎を備えさせ，彼らの知的能力を最大限に発達させること」(Deutsche Pädagogische Zentralinstitut 1959: 5)が目指されることになる。

もう1つ、生物の教授プラン基本構想の背景として、Ulbricht が第5回党大会での報告で「社会主義道德の十戒」と並んで、青少年の性的問題への積極的な対処を求めたことも考慮しておかねばならないであろう(池谷 2011b)。すなわち、Ulbricht は、「社会主義道德の發展にとって男女関係における清潔さと家族に対する尊重は最大の意義を持っている」として、子どもの「自然の啓発」をないがしろにしないよう、次のような警告を発したのである(Ulbricht 1958: 124)。

社会主義道德の發展にとって男女関係における清潔さと家族に対する尊重は最大の意義を持っている。近年共和国のいたるところでなされている発言において、多数の勤労者は、家族が、子どもの社会主義的教育とわが社会主義的共同体の發展にとって大きな意味をもつことを指摘してきた。例えば家庭で子どもになお時代遅れの諸観念が伝えられるならば、あるいは男女の関係について自然な啓発が行われないならば、子どもはしばしば彼らの発達を阻む困難と葛藤に陥る。

こうして、Ulbricht によって家庭における社会主義的な性教育の必要性が「公式に」強調された(ただし、その内容として強調されたのが「男女関係における清潔さと家族に対する尊重」であった)。

こうしたことを背景にして、基本構想案の生物では、まず何よりも、特別な価値は、低次の生物から高次の生物への發展、自然の生物学的な合法則性および人間によるその応用を示す教材領域におかれる(世界観的訓育・陶冶)。第2に、実践との結びつきが強調される。つまり、学校庭園での実際の作業、エクスカージョンや社会主義生産の授業日での農業や林業の作業で生徒の生物学の知識を活性化し、重要な能力や技能を発達させることが目指される(Deutsche Pädagogische Zentralinstitut 1959: 74)。そして第3に、「人間の解剖学と生理学」は、1957年教授プランよりも早く、8学年と9学年とに分けて教えられることになった。具体的には、8・9学年の生物の授業構成は表13のようになっている。

このように、基本構想案では「人間の解剖学と生理学」は8学年と9学年に分けて2年間で扱われるようになっている(計46時間)。ただし、性に関する項目は9学年に配置されている。すなわち、8学年では、a) 哺乳類としての人間、b) 支持・運動系、c) 皮膚系、d) 新陳代謝の器

表 13 8・9 学年の生物の授業構成

8 学年	
1. 森林	15 時間
2. 人間の解剖学と生理学	20 時間
3. 植物の主要部分とその機能	23 時間
4. 物質の循環	2 時間
9 学年	
1. 家畜の育種の農業生物学的基礎	10 時間
2. 人間の解剖学と生理学（続き）	26 時間
3. 動植物の育種	24 時間

官系（栄養器官，呼吸器系，血液・リンパ脈管系，排泄器官）を学び，9 学年で e) 内分泌，f) 感覚器官と神経系，g) 人間の生殖器官と個体発生的発達，h) 人間の系統発生的発達，i) DDR における国家の保健福祉（Gesundheitsfürsorge）を学ぶことになっている。もっとも，ここには性病の項目は入っていない。

また，57 年生物教授プランと比較すると性教育に関する部分には格段の進歩があった（表 14）。第 1 に，10 学年で扱われていた「人間の解剖学と生理学」が 8・9 学年に下ろされた。第 2 に，1957 年教授プランでは性に関する部分は感染症ぐらいのものであったが，1959 年基本構想案では「人間の生殖器官と個体発生的発達」の項が新たに設けられた。というよりも，SED の性教育の要請もあって，1954 年教授プランにあった「泌尿生殖器官系」と「人間の個体発生的発達」が一つにまとめられて，新たに「人間の生殖器官と個体発生的発達」の項目が立てられたと言ったほうがより正確であろう。

表 14 57 年生物教授プランと 59 年基本構想案の性教育部分の比較

1957 10 学年	26	1959 案 8・9 学年	46
B. 人間の解剖学と生理学		8 学年	
I. 新陳代謝器官と新陳代謝	10	2. 人間の解剖学と生理学	20
1. 栄養		a) 哺乳類としての人間	
2. 呼吸		b) 支持・運動系	
3. 血液・リンパの循環		c) 皮膚系	
II. 内分泌	2	d) 新陳代謝の器官系（栄養器官，呼吸器系，血液・リンパ脈管系，排泄器官）	
III. 感覚器官と神経系	8	9 学年	26
1. 感覚器官		2. 人間の解剖学と生理学（続き）	
2. 神経系		e) 内分泌	
IV. 人間の健康維持	6	f) 感覚器官と神経系	
1. 個人の衛生		g) 人間の生殖器官と個体発生的発達	
2. 感染症とその撲滅		h) 人間の系統発生的発達	
3. DDR における保健制度		i) DDR における国家の保健福祉	

3. 1959 年教授プランの特徴

この基本構想案をめぐるのは，約 400 通の書面で意見が出され，7 学年の教材の多さや進化論の篇の範囲ならびに教材順序が批判され，学校庭園をめぐるのは激しい論争が交わされた。もっとも，投書者や討論参加者の圧倒的部分は教材の概要に賛成し，変更提案は些細な変更に限られ

ていた (Krombholz/Lengert 1959: 309)。

性教育に関わっては、議論は大きくは、①9学年で人間の生殖を取り扱うべきかいなか、②新たな8・9学年用生物教科書『人間』(Der Mensch. Ein Lehrbuch für den Biologieunterricht.)をめぐる問題、③男女共習で行なうべきかいなか、④親と学校との協力、⑤教員養成と教員継続教育における性教育の課題、の5つにまとめられる。

これらの点については後で検討することとし、ここでは議論の末に出された59年生物教授プランがどう変わり、どのように具体化されたのかを見ていく。

まず、59年教授プランが10年制普通教育総合技術上級学校における授業の義務上の基礎となることが人民教育省大臣Lemnitzの名前で強調されている。教員は今後この教授プランに拘束されるということになった。

次に、基本構想案で強調されたように、ここでも、この教授プランの目標は、すべての教員に、社会主義教育目標から生じる陶冶・訓育の主要任務を果たすことができるようにさせることである。では社会主義教育とは何か。教授プランにSED第5回党大会でのW. Ulbrichtの報告が引用されているように、それは「人格の全面的発達、連帯と集団的行為への訓育、労働に対する愛への訓育、戦闘的活動への訓育、高い理論的・芸術的普通教育の伝達、すべての精神的・身体的能力の展開、すなわち民族と国民の福祉(Wohl)のための社会主義的意識の形成」(Ministerium für Volksbildung 1959a: 11; Ulbricht 1958: 125)を意味している。そして、この目標の達成のために、学校を生活と緊密に結びつけ、社会主義の発展の要求と一致させることが必要であるとされる。学校と生活の結合の中心に位置するのが、ここでも総合技術陶冶・訓育である。「総合技術陶冶・訓育は全学年における授業の基本特徴と構成要素であり、社会主義教育の核なのである」(ibid.: 12)。

こうした見地から生物教授プランでも、生物学的合法則性の理解、生きた自然の発展の基本法則の理解と並んで、総合技術陶冶・訓育に貢献することが求められている。すなわち、「動植物、生物学的な現象と事象についての一般的な知識を伝達する際に、生徒は同時に農業生産の科学的基礎を習熟させられる。微生物学、植物の解剖学と生理学といった関係する教材領域を取り扱う際に、とくに重要なのは、獲得された認識の農業実践での応用を明らかにすることである」(ibid.: 2)。

では1959年生物教授プランは基本構想案とどう違っているであろうか。両者を比べてみたものが表15である。

これを見てもわかるように、第1に、「人間の解剖学と生理学」については、基本的には1959年生物教授プランは基本構想案と大きくは変わらず、2年間にまたがり、9学年で人間の性に関する部分が教えられることになっている。もっとも、8学年で教えられていた「新陳代謝の器官系」が「新陳代謝」として9学年に移り、「人間の解剖学と生理学」に費やされる時間数が46時間から44時間へと、少し減らされている。第2に、1959年教授プランでも相変わらず「出産」は扱われていない。第3に、生徒に指摘する項目として、新たに「青少年期のセクシュアリティ」

表 15 1959 年基本構想案と 1959 年生物教授プランの比較

1959 年基本構想案	時間数	1959 年教授プラン	時間数
8 学年		8 学年	
1. 森林	15	1. 植物の解剖学と生理学（Ⅰ部とⅡ部）	28
2. 人間の解剖学と生理学	20	2. 人間の解剖学と生理学（Ⅰ部）	10
a) 哺乳類としての人間		2.1 人間の器官系の概観	
b) 支持・運動系		2.2 支持・運動系	
c) 皮膚系		2.3 皮膚系	
d) 新陳代謝の器官系（栄養器官，呼吸器系，血液・リンパ脈管系，排泄器官）		3. 群集としての森林	22
3. 植物の主要部分とその機能	23	9 学年	
4. 物質の循環	2	1. 生物学と農業	26
9 学年		2. 人間の解剖学と生理学（Ⅱ部）	34
1. 家畜の育種の農業生物学的基礎	10	2.1 新陳代謝	
2. 人間の解剖学と生理学（続き）	26	2.11 人間の栄養	
e) 内分泌		2.12 消化器官	
f) 感覚器官と神経系		2.13 呼吸系	
g) 人間の生殖器官と個体発生的発達		2.14 血液・リンパ脈管系	
h) 人間の系統発生的発達		2.15 排泄器官	
i) DDR における国家の保健福祉		2.2 人間の生殖器官と個体発生的発達	
3. 動植物の育種	24	男性生殖器官（精巣，輸精管）／女性生殖器官（卵巣，卵管，子宮）／月経／性病の指摘／青少年期のセクシュアリティ問題の指摘／男性と女性の生殖細胞・胚細胞／受精と最初の卵割期／胎児の发育／人間の個体発生的発達に及ぼす放射線の影響	
		2.3 内分泌	
		2.4 感覚器官と神経系	
		2.41 感覚器官	
		2.42 神経系	
		2.5 衛生	
		2.51 個人の衛生	
		2.52 労働衛生	
		2.53 感染症	
		2.54 DDR における保健制度	

と「人間の個体発生的発達に及ぼす放射線の影響」が挙げられている。真正面から青少年のセクシュアリティ問題を取り上げたこと自体画期的なことであったと言える。

ただし、一般的には 1959/60 学年度以降、遅くとも 1960/61 学年度以降にはこの教授プランにもとづいて授業がなされるような移行措置が取られている（Ministerium für Volksbildung 1959b）。それによると、移行期間中は、8～10 学年の内容と時間数は表 16 のようになっている。つまり、「人間の解剖学と生理学」は移行措置の間、8～10 学年の 3 年間で教えてもよいとされたのである。

4. 1959 年基本構想案と教授プランをめぐる議論

先に述べたように、1959 年基本構想案については、性教育に限っても多くの意見が出されていた。ここでは、先に挙げた 5 つの論点のうち、①～③を取り上げておこう。

表 16 移行措置

学年	時間数
8 学年	
1. 群集としての森林	22
2. 腔腸動物をとくに考慮した動物界の概観および海綿動物と棘皮動物の指摘	6
3. 人間の解剖学と生理学（Ⅰ部）	10
4. 植物の解剖学と生理学（Ⅰ部）	15
5. 植物の解剖学と生理学（Ⅱ部）	7
9 学年	
1. 生物学と農業	26
2. 人間の解剖学と生理学（Ⅱ部）	15
註：この教材領域ではとくに人間の栄養と消化事象が取り上げられる（……）。呼吸，血液循環，神経系による新陳代謝のコントロール，内分泌に関する知識がそこで確固なものとされる。新たに以下のことが取り扱われる。人間の生殖器官と個体発生的発達（……）。衛生（……）	
3. 群集としての森林	19
10 学年	
1. 人間の解剖学と生理学	15
2. 進化論	20
3. 動植物の育種	21

(1) 9 学年での生殖の取り扱いをめぐる

まず何よりも、9 学年で生殖の問題を扱うことに意見が集中した。つまりどの学年で性の問題を扱うべきかということに議論が集中した。これに対する意見は大きく 3 つにわかれる (Krombholz/Lengert 1959; Kupke 1960)。1 つは、教材領域「人間の生殖器と個体発生的発達」を 10 学年で扱うよう求めるものである。教授プランが導入されても、9 学年での授業で取り扱うことを誤りだと考える者もいるし、親からも、子どもは 9 学年の生物の授業で人間の生殖器を取り扱うことで墮落させられるのではないかという意見が出されていた (Trutschel 1960: 450)。2 つめの意見は、逆にこれをもっと早く 5 学年や 7・8 学年で取り扱うよう求めるものである。そして 3 つ目は、これが大勢的な意見だが、提案通り 9 学年で行なうべきだとするものである。Krombholz/Lengert は次のように述べて、9 学年での取り扱いに賛成している。生徒が理解ある受け入れをするには、一定の成熟が必要だが、この問題を 9 学年の終わりに扱うことに対してはほとんど懸念が表明され得ない、と (ibid.: 315)。また Kupke は、別の理由から 9 学年での取り扱いを支持している。すなわち、方法上の理由と専門の理由から、9 学年の教授プラン篇「人間の生殖器と個体発生的発達」への準備および導入として、これまで生徒が獲得した、動植物界における生殖関係に関する知識を活かして繰り返せばよいというのである (ibid.: 16)。

後でも見るように、その後 60 年代にも、この議論は継続されていく。Baer や Kirsch らの生物学者、教育心理学者の Grassel、学校での性教育実践家である Bach らは、5 学年から系統的に性教育を進めることと同時に、9 学年よりも早くに生殖と個人の発達を扱うことを提案して、独自のカリキュラムを提案していくことになる（これについては、池谷 2012c）。

(2) 教科書『人間』をめぐる

もう1つの議論は、先の問題とも関わって、教授プランでは9学年で「人間の生殖器と個体発生的発達」を扱うとしているのに、教科書『人間』が8・9学年用として8学年の生徒の手にすでに渡ってしまうという問題をめぐってなされている。「この教科書で9学年の教材、とくに人間の胎児の発育に関する絵が、このテーマがすでに授業で扱われることなく、8学年の生徒の手に置かれることに対するプロテストの声が大きくなっている。何人かの生物の教員は、8学年の生徒が指導もなく、もっぱら好奇心からこれらの絵を見てテキストを読むことに危険を見ている」(Kupke 1960: 17)。

実際、Dietrich (1959) がアンケート調査した教員の大部分はこの教科書に賛成しているが、何人かの教員は懸念を表明している。第1の懸念は、「こうしたやり方で8学年の生徒が、まだ彼らの視野の外にあり、彼らがまだ興味を持たないしまだ何ら推測もしない問題に引き寄せられないかどうか、したがって8学年の生徒が当該の教科書のこの篇を読むことによって早期化が始まらないかどうか」(512) という心配である。この懸念をめぐっては、次の2点が指摘されている。1つは、生徒がすでに「不適切で彼らの性格の発達に害のある情報源」から得た情報で、好奇心をなおいっそう引き起こされ、それが人間の性的共同生活問題に対してかなり不健康な態度を引き起こすことになることであり、もう1つは、少なくとも女子生徒はすでに初経が始まる第8学年よりも早くに、家庭で部分的な、たいていはほとんど不十分な教えを受けていることである (ebd.)。医師の Mosler もまた、13～14歳の生徒でもすでにこの問題にふけているのだから、生物の授業において、青少年に事物に即して明確で諸関連を啓発するやり方で、生殖器の解剖学と生理学をもっと詳しく理解させることは早く行っても早すぎることはない、と考える。「その時のみ、われわれは通りの不潔な性的「啓発」に先手を打てるし、そうすれば子どもはエロチックとセックスと結びついたひそひそ伝えられる啓発 (Flüsteraufklärung) にもはやそんな聞き耳をたてないであろう」。また教員の方も、生徒をなだめて次の学年に希望を抱かせるよりもむしろ、「すでに8学年の生徒に、彼らを興奮させる質問に対して回答することで、寄せられた信頼に応えるべきであろう」(BioS 1960, Heft 1: 17-18)。

第2の懸念は、生徒はこの教科書を手にして読んでいるのに、教員の方が8学年の生徒にはそのことを話さないでいるという問題をどうしたらいいのかというものである。これは、生物の授業での性的問題の取り扱いの系統性に関わる問題である。これに対しては、Dietrich はそれ以前の学年で動植物の生殖に関わるテーマがあるので、それを取り扱えば、「人間の生殖」の篇を授業で取り扱わなくても、8学年の生徒がそれを理解し客観的に受け容れることが保証される、と考えている (513)。同じように、生物教員の Bollmann も、9学年での生殖器と個体発生的発達のテーマを孤立させず、また準備もなく取り扱わないで5学年から体系的に準備をすることを提起している (BioS 1959, Heft 11: 515)。

こうした懸念は教員だけではなく、親の側にもあり、教員と親との間で、これをめぐって激しい議論が交わされた (Kirsch 1964: 517)。実際、雑誌『親と学校 (Eltern und Schule)』編集部

宛てに、Müller という人から次のような投書があった。「私は、14 歳の子どもがすでにこれやあれやの絵を見ることができるようになるのはまったく間違いだと思います⁵。われわれの子どもたちは早くから性的発達の問題に注意を向けさせられることになります。彼らがこうした本で墮落させられる危険があります」(Friede 1962: 33 より引用)。親たちのこうした抗議の申し入れに対して、学校監督庁ですら、出されたこの教科書を回収することに回ったほどであったという (Kirsch 1964: 517)。

(3) 男女別習か共習か

3 つめは、とくに 9 学年で生殖器を扱う際に、男女別で授業を行うべきか、それとも共習で行なうべきかということをめぐる議論である。Friede (1962: 34) によると、この時期には、まだ「多くの親と教員は、女子生徒と男子生徒を人間の泌尿生殖器系に関する授業の間分けるべきだと考えている」。

こうした別習の教授方法に対しては、2 つの点で批判されている。第 1 の批判は、DDR の学校では、男子と女子は 1 学年から一緒に授業を受け、4 年間一緒に生物の授業に参加し、植物の授粉、脊椎動物の受精も学んできた、それなのに「なぜ彼らは人間の生物学のところでも一緒に授業を受けてはならないのか？」(ebd.) というものである。第 2 に、わざわざ別習にすることで、逆にこの授業が何か特別なものだという印象を生徒に与えかねないという点で、別習が批判される。Trutschel (1960) は、教材は他の生物の教材と異なってはならないし、教材は何か特別なものだという烙印を押されてはならないから、「男子と女子の分離も決して行なわれてはならない」(451) と主張している。Kupke (1960) もまた、男女別に分けることで、人間の解剖学と生理学を他の生物の領域と同等に扱うことが達成されないし、「異性に対する関心が秘密に満ちたものという性格を帯びる」ことになるとして、別習に反対している。このように、総じて男女共学は性教育における授業方法として肯定されてきている（なおこの男女共学に関する議論については、池谷 2012b も参照のこと）。

5. 教科書『人間』の構成と内容

では、論争の的になった『人間』はどのような特徴を持っているであろうか。それまで 11 学年生徒に用いられていた教科書『人間学』と対比しながら、その特徴と問題点を考えてみよう (表 17)。

『人間』がそれまでの教科書『人間学』とまったく違う点は、「はじめに」のうちにとくに表現されている。すなわち、後者では人間の解剖学と生理学の意義が生物の生理学的過程に焦点を当てて論じられていたのに対して、前者では人間と他の生物との違いがとくに強調されている。すなわち、人間は「最高に発達した生物」として、「人間の四肢を労働のために自由にする直立の身体の保持、および人間に唯一の生物として言語と思考を可能にする脳の特殊な形成」という 2 つの特長を持ち、これによって「人間は自然の主人になっている」(Der Mensch: 5)。

表 17 『人間学』と『人間』の構成比較

人間学 1952 図も含めた本文 173p (17) 図 138 (13)	人間 1961 図も含めた本文 124p (7) 図 117 (8), 表 4
A. はじめに I. 解剖学と生理学の任務と意義 II. 諸器官と器官系 B. 人間身体の運動系 I. 支持系 a) 支持組織 1. 結合組織 2. 軟骨組織 3. 骨組織 b) 人間の骨格 c) 骨と関節の病気と損傷 II. 運動系 a) 筋肉組織の構造と機能 b) 人間の筋肉組織 c) 病気と損傷 C. 皮膚器官 D. 新陳代謝 I. 栄養 a) 栄養素 b) 消化器官 c) 消化事象 d) 血液とリンパにおける栄養素の摂取と身体におけるその変換 e) 栄養とエネルギーの必要 f) ビタミン g) 胃腸の病気 II. 呼吸 III. 血液・リンパの循環 a) 血液 b) リンパとリンパ管系 c) 血液循環 d) 血管・心臓・循環の病気 E. 泌尿生殖系 I. 泌尿器 II. 生殖器 a) 女性生殖器 b) 男性生殖器 c) 性病 F. 人間の個体発生的発達 I. 受精と胎の初期発達 II. 胚葉の形成以後の胎児の発育 III. 器官の形成 IV. 出産 G. 内分泌 H. 感覚器官と神経系 I. 感覚器官 a) 一般的な感覚生理学 b) 皮膚感覚器官 c) 化学的感覚の器官 d) 視覚器官一目 e) 耳の感覚器官 II. 神経系 a) 神経組織 b) 一般的な神経生理学 c) 脊髄 d) 植物神経・自律神経系 I. DDR における保健衛生機関	はじめに 人間の身体構造 細胞 組織 器官と器官系統 支持・運動系統 個々の骨の構造 関節 骨格系統と筋肉 新陳代謝 身体のエネルギ需要 栄養 栄養素／無機質 ヴィタミン 食物の調理と保存 嗜好品 消化系統 口での消化経過 嚥下と胃への輸送 胃での消化経過 腸での消化経過 正しい栄養のための規則 呼吸 気道 肺 血液系統 物質の輸送 血液凝固 血液の防衛機能 造血と血液の分解 循環系統 心臓 血管 リンパ管 排泄 皮膚 皮膚の特殊な形成 皮膚のケア さまざまな器官系統の協力の例 栄養素の摂取と輸送 筋肉の新陳代謝 温度調節 感覚器官 人間における刺激受容 目 耳 鼻 舌 皮膚の受容体 調節系統 ホルモン系統 神経系 人間の神経系 人間の生殖 人間の生殖細胞 人間の発達 衛生 伝染病の衛生 個人の衛生 一般衛生 労働保護と労働衛生 社会衛生 人間の起源 付録 応急処置

() 内の数字は、性教育に関係するページ数と図の数。

次に、「人間の生殖」という節が設けられ、そこで「人間の生殖細胞」と「人間の発達」が扱われている。全体として生理学的説明が簡潔になされ、ページ数も減り、図も 13 から 8 に減っている。

この節の特徴は、第 1 に、生殖が「新陳代謝と被刺激性と同様に生命の 1 つの基本的な性質である」と、生物との連続性の中で位置づけられていることである。

第 2 に、人間の生殖器官が『人間学』のように独立した項目として立てられておらず、人間の生殖との関連で扱われている。ここでは、「生殖器には、生殖細胞の製造場所だけでなく、男

性生殖器と女性生殖器との結合を可能にし、胎児の発育を保証する器官も入る」と説明されている。ただし、『人間学』と同様に、ここでも性器は解剖学的に図示されるだけで、人間の身体の中かで性器がどこに位置し、どうなっているのかは、とくに女性ではきちんと図示されていない。また、後の教科書と比べてみると、この『人間』だけが唯一精子の模型図を載せていない。さらに精子が卵子に入り込む前提としての「性交」も、『人間学』と同様に取り扱われていない。

第3に、『人間学』が出産で終わっているのに対して、『人間』では出産後の人間の発達が老人期に至るまで簡潔に述べられている。ただし、人間の身体的発達の絵として男性の裸体がペニス付きで描かれてはいるものの、女性のそれは載せられていない。ここには発達における男性中心主義が見られる。

第4に、性病は、『人間学』とは異なり、「衛生」の節で扱われ、それに割くスペースも少なくなっている。

第5に、遺伝子の変異を引き起こす放射線問題として、核実験の持つ危険性が、広島の実験も踏まえて、扱われているのも特徴的である（その際、核実験の即時停止と核兵器の製造・貯蔵・使用の禁止に反対する社会主義の人間主義的優位性が同時に強調されている）。

6. 『生物の授業 方法についての教員向けハンドブック』（1962年）

もう1つ、この時期の生物の授業を知る手がかりとして、ドイツ教育中央研究所が1959年の生物教授プランにもとづいて1962年に出した生物の授業についての教員向けハンドブックがある（Deutsches Pädagogisches Zentralinstitut Sektion Unterrichtsmethodik und Lehrpläne 1962）。「人間の生殖器と個体発生的発達」（Baer 1962a: 321-324）はこの中ではどのように扱われているであろうか。

まず9学年の生物における「人間の解剖と生理学」のねらいとして、「人間を全生物世界の分枝として考察すること」と、「生徒に動物界との人間の質的な違いを意識させねばならない」（ibid.: 312）ことが挙げられている。

しかし、この著者のBaer自身は、この「人間の生殖器と個体発生的発達」の教授プランには問題があり、改善の余地があると考えている（Baer: 1962b）。第1は、出産過程が扱われていないので、それを教材へ組み入れることであり、第2に、DDRの社会的発展に応じて、性病は今日われわれのところではほとんど問題にならなくなっている。第3に、「青少年期のセクシュアリティの諸問題の指摘」というだけでは、ただ「指摘」しさえすればよいとか、あるいはまったくしなくてもよいと理解されかねない。最後に、加速化現象で思春期の開始が明らかに2～3年早くなっているので、9学年の15歳の生徒にこれらの教材に初めて触れさせるのでは遅すぎる（39; 池谷 2011c）。

Baerの考えでは、9学年では、下位学年で準備されてきた性的諸問題が科学的に明確に総括的に提示されねばならない。また、「生殖器の解剖学と生理学および人間の個体発生的発達に関する生徒の純粋な知識獲得」だけでは十分でなく、生物教員は何よりも訓育の観点を持たねばな

らないことが強調されている。「生物学的関連に関する知識伝達と並んで、生物教員の任務は、生徒に男女関係の倫理的側面、愛をも把握することを教えることである」(ebd.) というのである。

こうした問題点を踏まえて、Baer はこの教材単元の授業構成案をここで提起している (1962a: 321; 1962b: 43)。

- 1 時間目：男性生殖器の解剖と生理学
- 2 時間目：女性生殖器の解剖と生理学
- 3 時間目：男性と女性の生殖細胞・胚細胞、受精と最初の卵割段階
- 4 時間目：胎児の発育

1 時間目では、次のような基本的知識の獲得が目指される。まず男性生殖器には、1 対の精巣、副精巣および輸精管、膀胱腺、前立腺およびペニスがある。精巣で精子が多数つくられ、それが他の上述の腺の分泌液と一緒に、ペニスを通っている尿管をつうじて外部へ出ることがある。精巣はホルモン（生殖腺・性腺ホルモン）をも血液へと送り届けるので、精巣はその機能からして、内分泌と外分泌を備えた腺に数えられる。と同時に、教員には生徒に次の知識を伝えることが勧められている。「思春期の開始後男子ではよく寝ている間におこる遺精はまったく自然な過程であって、心配するには及ばないこと」、第 2 に、「若者のこの発達段階でこそ、労働・スポーツ・遊びでの適当な身体的疲労が、健康で調和的な発達に貢献し若者の成熟と関連する抑うつを克服するのに適切であること」、「思春期開始後の頻繁な誤った発達（マスタベーション）の指摘」、「もっとも頻度の高い性病の形態の指摘」。

2 時間目の核となる知識には、少なくとも以下のものが入る。子宮は女性生殖器の最も重要な部分である。子宮は強い、窪んだ、梨形をした筋肉であり、それは狭い前部をもって陰嚢へと突き入っている。陰嚢は外部へは内陰唇と外陰唇とによって仕切られる。卵巣では性的成熟後に 23 日～28 日のサイクルで卵子が発育し、これがその成熟後卵管を通して子宮へと運ばれる。受精が起こらなければ、卵子は数日後に死んで月経の始まりとともに排出される。その際、教員は、「女子生徒に月経カレンダーを誠実につけること」を指摘することを怠ってはならない、としている。

また、次のようなことは教員自身に委ねられるが、そのために教員にはきわめて誠実な準備が必要だとしている。「この教材単元のどの箇所で、教員が自分の生徒とオープンにかつ率直に、さまざまな年齢段階での男子と女子の関係について話すか、いつ教員は時期尚早の性交の危険性を指摘するのか、そして教員は非難すべき法律違反の堕胎についてや誤った発達の形態について話すかどうか、話すとするばどの箇所でかは、教員自身に委ねられていなければならない」(1962a: 322)。

3・4 時間目については、次のように述べられている。この授業時間の教材は、男性の生殖細

胞と女性の生殖細胞、成熟後の男性生殖器と女性生殖器でのその発育と道程ならびに受精過程を含んでいる。最初の授業時間テーマの教材は、2細胞段階、4細胞段階、8細胞段階から桑実胚までの受精した卵細胞の分裂とそれが子宮に着床することで終わる。2時間目では、胎児の子宮内での発育から出産成熟の状態までが扱われる。ホルモンの作用によってコントロールされる出産過程を指摘することで、この授業単元は終わる。

最後に、放射能汚染の問題として原爆の問題が取り上げられている。教育的観点からは、若者に日本での原爆投下を例にした放射能汚染の壊滅的な結果を意識化させるよい機会として、教員には、原爆死に反対するすべての平和愛好国の闘争を強調し、社会主義諸国、とくにわが共和国では、芽生えつつある生命をこうした破滅的な放射線から守るだけではなく、さらに関係する法律にもとづいて、母子にあらゆる援助と支援を与えるすべての前提が作り出されていることを強調することが勧められている（1962a: 323-324）。

なお、Baer が教科書『人間』に載っている図はほとんど適切ではない（323）と批判していることも付け加えておこう。

おわりに——まとめにかえて

以上、DDR における生物教授プランの変遷とそれをめぐる議論、および教科書の変遷を 1959 年まで辿ってきた。そのなかで確認された点をここでまとめておこう（表 18）。

まず第 1 に、戦後の生物教授プランの変遷の中で、性教育に関する部分の取り扱いが、当初は 11 学年であったものが、50 年代後半には 10 学年に、そして 59 年プランでは 9 学年で扱うように変わってきた。しかし、この取り扱いの学年をめぐっては一貫して論争があり、それでは青少年のセクシュアリティの現状からして遅すぎるのではないかということが指摘され続けてきた。

第 2 に、性を扱う単元の名称や内容が次のように変化している。

- ① 46 年プランでは、「生命論」で乳児期から老年期までの人間の個人的発達と衛生が扱われ、11 学年の「人間の個体発生」の単元で、受精、胚の発育や出産が中心的に扱われていた。
- ② 51 年プランになると、「生命論」の項目がなくなり、「人間の解剖学と生理学」が登場してくる（これ以降この単元の名称は 1959 年プランまで変更されていない）。そのうち、性に関する部分は「D. 生殖器」と「F. 人間の個体発生的発達」となり、前者では生殖器と性病が取り上げられ、後者では受精と胚の発育がメインとなり、出産が扱われなくなる。
- ③ 1953・54 プランになると、「人間の解剖学と生理学」全体の構成に大きな変化はないものの、「D. 生殖器」と「排泄器官」がまとめられて、「D. 泌尿生殖器系」とされる。ただし、53 年プランと 54 年プランとでは、前者では「D. 泌尿生殖器系」のあとに「E. 人間の個体発生的発達」が続いているのに、後者のプランでは生殖器と切り離されて扱われている点で異なる。性に関する部分を見ると、「生殖器」に関する部分は大きくは変わらないが「月

表 18 1959 年までの生物教授プランにおける性教育関係項目の構成の変遷

1951b (11 学年・10 時間)	1953 (11 学年・7 時間)	1954 (11 学年・8 時間)
D. 生殖器 (2) 生殖器 性病 (淋病, 梅毒, 下疳) とその撲滅 国民の健康にとっての危険. 性病蔓延の社会的制約 E. 人間の個体発生的発達 (8) 1. 予備発育と胚の発育 精細胞の発育. 女性の生殖細胞, 黄体の発育, 受精と卵子の移送, 原腸形成, 胎盤の発育. 2. 諸器官の発育 身体の外形の発育. 系統進化の段階をとくに考慮しての外胚葉, 内胚葉, 中胚葉の諸器官の発育.	D. 泌尿生殖系 II. 生殖器 (2) 女性生殖器; 卵胞の発育, 月経サイクル. 男性生殖器; 性病 (淋病, 梅毒, 下疳) とその撲滅 国民の健康にとっての危険. 性病蔓延の社会的制約. E. 人間の個体発生的発達 (4) I. 受精と胚の初期発育 男性の生殖細胞と女性のそれ. 卵細胞の受精, 卵割, 胚葉形成, 胎盤の発育. 双生児の形成. II. 胚葉の形成後の胎児の発育 身体の外形の発育. 進化論の特徴を考慮しての胚葉からの諸器官の発育. 出産. 復習 (1)	D. 泌尿生殖系 II. 生殖器 (3) 女性生殖器; 卵胞の発育, 月経サイクル. 男性生殖器 性病 (淋病, 梅毒, 下疳) とその撲滅. 国民の健康にとっての危険. 性病蔓延の社会的制約. G. 人間の個体発生的発達 (5) I. 受精と胚の初期発育 男性の生殖細胞と女性の生殖細胞, 卵細胞の受精, 卵割, 胚葉形成, 胎盤の発育. 双生児の形成. II. 胚葉の形成後の胎児の発育 身体の外形の発育. 進化論の特徴を考慮しての胚葉からの諸器官の発育. 出産.
1956 (10 学年・6 時間)	1957 (10 学年・6 時間)	1959 (9 学年・約 4 時間)
B. 人間の解剖学と生理学 4. 人間の健康維持 a) 個人の衛生 b) 感染症とその撲滅 c) DDR における保健制度	B. 人間の解剖学と生理学 IV. 人間の健康維持 1. 個人の衛生 2. 感染症とその撲滅 3. DDR における保健制度	2.2 人間の生殖器官と個体発生的発達 男性生殖器 (精巣, 輸精管) 女性生殖器 (卵巣, 卵管, 子宮) 月経 性病の指摘 青少年期のセクシュアリティ問題の指摘 男性と女性の生殖細胞・胚細胞受精と最初の卵割期 胎児の発育 人間の個体発生的発達に及ぼす放射線の影響

() 内の数字は時間数

経サイクル」が付け加えられている。また、「人間の個体発生的発達」の部分では、「双生児の形成」と「胎児の発育」が新たに付け加わり、「出産」が再び取り扱われようになる。

- ④ 1956・57 年 10 学年生物教授プランは、全体的に「人間の解剖学と生理学」は縮小され、受精、胎児の発育、出産など生殖と個体発生に関する事柄はまったく消え去る。この点では、50 年代前半の教授プランより後退している。そのかわりに、動植物の育種と遺伝学説が重視される。その理由は、「現代の高度に発達した農業の必要に適い、生徒を農業生産の基礎に習熟させる」こと、そのことによって「総合技術陶冶・訓育」に重要な貢献をすることを最重要・最優先課題としていたからであり、また生物の授業を通しての世界観的教育を重視していることによる。

⑤ 1959 基本構想案と 1959 年プランは 1957 年プランに比べると格段に進歩している。10 学年で扱われていた「人間の解剖学と生理学」が 8・9 学年で扱われ、性に関する部分は 9 学年に下ろされた。また、「泌尿生殖器系」と「人間の個体発生的発達」が一つにまとめられて、新たに「人間の生殖器官と個体発生的発達」の項目が立てられ、59 年プランでは新たに「青少年期のセクシュアリティ」と「人間の個体発生的発達に及ぼす放射線の影響」を取り扱うとしている。さらに重要なことは、この教授プランによってドイツで初めて学校ですべての青少年に性教育することになったことである。というのも BRD では 1968 年になってようやく文部大臣会議で性教育に関する勧告が出され、性教育が国家として本格的にスタートするからである（この点については、池谷 2009 参照）。

1959 年生物教授プランの導入後、DDR では 60 年代にロストック大学を中心に Grassel や Bach, 先の Baer らは精力的に性教育の研究に取り組み、性教育に関する会議を開き、性教育の理論と実践の総括と課題を明らかにしていく（池谷 2011c; 2011d; 2011e）。そのなかで、1959 年の生物教授プランの問題点もまた次第に明らかにされてくる。

その第 1 の問題点は、9 学年ではじめて生徒に性に関する事柄を教えるのでは遅すぎるということである。その 1 つの理由は、性的成熟が 2～3 年早くなっている（性的成熟の加速化）、9 学年で扱うのでは遅すぎるというものである（Baer 1962b；加速化の議論については、池谷 2012a, 参照）。2 つ目の理由は、1 つ目と絡むが、生徒の性的関心が 7 学年から増大しているという調査の事実からである（Bach 1966；Sende 1966）。3 つ目は、生徒の一部が 8 学年を終えて学校を去っても、次の職業学校の教授プランではこの領域が考慮されていないから、9 学年以前に教えるべきだということである（Bach 1966）。1962 年に開催された第 1 回性教育研究会議でも、その総括の中で「性教育は 9 学年で初めて行われてはならず——間接的・直接的な作用の形態で——すべての学年段階で考慮されねばならない」（Grassel 1966）ことが指摘されている。

第 2 の問題点は、生殖を教えるのに、性交や出産、避妊が扱われていないことである。Baer (1962c) は出産を教材として組み入れることを求めていたし、その報告をめぐって行われた討論でも、出産と避妊の取り扱いが求められていた（池谷 2011c）。また Baer はその後の授業提案では（Baer 1966）、「人間の生殖器と個体発生的発達」を 5 時間構成とし、4 時間目で「ホルモンの働きによってコントロールされ筋肉運動によって引き起こされる出産過程」を扱い、5 時間目の「人間のセクシュアリティ」で性交と避妊を扱うことを提案している。Grassel (1962) も、いつ避妊の問題を取り扱うかについては性教育者の間で論争があるものの、このテーマ自体を取り扱うことでは広範な一致が見られるとしている。もっとも、Baer 自身は、性交や避妊の取り扱いについては、現在の状況では無条件に行う必要はなく、それぞれの教員の判断に委ねるべきだと、慎重な姿勢をとっている（1962b: 44; 1966: 744）。ただ、この時期には、婚前性交に関しては、現実主義的な対応をとってはいるものの、必ずしも望ましいものだとはみなされていない。

さらに、59 年生物教授プランで「青少年期のセクシュアリティの問題の指摘」というひじょ

うに曖昧な表現も問題にされている (Baer 1962b)⁶。

こうした指摘以外にも、生物教授プランにはいくつもの問題があった。1 つは、セクシュアリティの快楽の側面 (具体的に言えば、マスタベーションやクリトリスの指摘) やコミュニケーションの側面がまったく扱われていないことであり、もう 1 つはホモセクシュアリティの問題を取り扱っていないことである。

そして、何よりもこうした授業を担う教員の側にも大きな問題があった。59 年生物教授プランは、生物の教員に高い要求を課すことになったのに、性教育に対して教員の気後れや準備不足の問題があった。Grassel (1967: 148) によれば、教科教員全体では 3 割弱しか性教育の準備をしていないが、生物で性教育を行なう当の生物の教員ですら半数しか性教育に対する準備をしていない有様であった⁷。

以上のような問題点がその後の生物教授プランでは課題として残されることになった。

* 著者からの引用は、(1974: 5) のように、著作刊行年、ページ数の順に () 内に記す。

【註】

- 1 なお参考までに、これまでの先行研究 (三村和則 1989; 吉田成章 2011) では、DDR の教授プラン全体の変遷は次のような 6 つの時期に区分されている。
 - ① 1945 年 9 月～1946 年 7 月 敗戦下での暫定的教授プラン
 - ② 1946 年 7 月～1951 年 9 月 反ファシズム・民主的 school 改革のための教授プラン
 - ③ 1951 年／52 年 9 月～1959 年 9 月 社会主義学校へ移行のための教授プラン
 - ④ 1959 年 9 月～1966 年 9 月 社会主義学校成立期の教授プラン
 - ⑤ 1966／72 年～1980／86 年 教育内容の現代化期の教授プラン
 - ⑥ 1980／86 年～ドイツ統一後 本質的なものへの集中をはかる教授プラン
- 2 もっとも、これらの教授プランは、控えめに言えば高い科学的水準のソ連の科学者たちの諸認識を活かしたものである (Uhlig 1975: 350)、あるいはもっと露骨に言えばソ連の教授プランを書き写したものであったという (Neuner 2000, 吉田 2011: 22)。
- 3 この『人間学』は、1952 年版を見ると、新たな上級学校用教授プランにもとづいて作成されたものと述べられているので、依拠したのは、1951 年の教授プランだと想定される。しかし、その構成を見る限りでは、1951 年プランよりも 1953 年教授プランのほうに類似している。とすれば、1953 年プランが『人間学』を参考にしたとも考えられるが、ここではそれ以上は推測できない。
- 4 もっとも、こでいう修正主義とは、Schirdewan やハリーヒラの反スターリン的改革派のことである (ウルブリヒト 1958)。とりわけ教育学分野では、「修正主義者は、単一の学校での青年の社会主義的教育を形式的な授業とすりかえ、単一の学校を分裂させて、才能のある生徒からなるえらばれた上層の教育を優先させる道をとった」(25) と、教育科学の代表者たちを「修正主義」と批判し、社会主義教育の必要性和その邁進を強調している。つまり社会主義建設とそのための教育を一挙に推進しようとすることに疑義を抱き、反スターリン的＝民主主義的改革を求める勢力を「修正主義」と断罪しているのである。このことが注意されねばならない。
- 5 Friede によると、ここで考えられている絵は、教科書『人間』の 105 ページにある子宮内の胎児の絵である。
- 6 こうした問題を抱える生物教授プランの具体的な改革をめぐるのは、1962 年の性教育研究会議時点では意見が大きく 3 つに割れていた。第 1 グループは教授プランそのものの改革を求め、また第 2 グループは、現行の教授プランの枠内でも、相応の教育的影響を及ぼす一連の好都合な機会を利用することが

できると考えていた。例えば、下位の学年段階でも、友だちの弟や妹の出産、女性教員の妊娠等といった機会があるといった具合にである。第3グループは、性的陶冶・訓育のために特定の事実を個々の学年段階に定めてそれを実施するよう求めた。しかし、個々の学年段階で伝達すべき知識と必要な教育的働きかけに関する正確な調査研究を行う必要があるという点では、すべての討論発言者の間で意見がまとまっていた（池谷 2011c）。

- 7 Tille (1993a) は生物における性教育に対する教員の問題状況として、ある教授学文献から、次のような文章を引用している（この文献名は記されていない）。「だが個々のケースでは、そのほかではよい生物の教員でも個人的理由から、この教材を授業で扱うことを進んで表明しないことが考えられる。この場合には無条件に教員集団での立ち入った話し合いの中で別の道が模索されねばならないであろう。今日でも残念なことに相も変わらずに行なわれているように、いくつかのクラスでは性的問題が授業で簡単に見過ごされることは耐えられない」（135）。

【引用・参考文献】

- Anweiler, Oskar/Fuchs, Hans-Jürgen/Dorner, Martina/Petermann, Eberhard (Hrsg.) 1992: Bildungspolitik in Deutschland 1945-1990. Leske+Budrich, Opladen.
- Aufgaben und Probleme der deutschen Pädagogik, Aus den Verhandlungen des V. Pädagogischen Kongresses Leipzig 1956. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin. 1956.
- Autorenkollektiv 1960: Geschichte der Erziehung. Erweiterte und Verbesserte Auflage. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin = 1962 東ドイツ教育史研究者集団『現代教育史——社会主義教育の成立と展開』江藤恭二・平野一郎・吉本均編訳, 明治図書.
- Bach, Kurt R. 1966: Erfahrungen aus der praktischen Arbeit an der Erich-Weinert-Oberschule Hohenmölsen. *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*. 15.Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 755-761.
- Baer, Heinz-Werner 1962a: Geschlechtsorgane und ontogenetische Entwicklung des Menschen. Deutsches Pädagogisches Zentralinstitut Sektion Unterrichtsmethodik und Lehrpläne 1962: Biologieunterricht. Methodisches Handbuch für den Lehrer.Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin. S. 321-324.
- Baer, Heinz-Werner 1962b: Unterrichtsmethode Probleme bei der Geschlechtserziehung in der Schule. *Pädagogik*, Beiheft 2, 1962, S. 37-45.
- Baer, Heinz-Werner 1966: Die Geschlechtserziehung im Biologieunterricht. *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock. Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, 15. Jrg, Heft 7/8, S. 741-746.
- Beschluß über die Aufgaben und den Aufbau der Mittelschule in der Deutschen Demokratischen Republik. Vom 15. März 1956. MONUMENTA PAEDAGOGICA 1969: 23-27.
- Der Mensch. Ein Lehrbuch für den Biologieunterricht. 1961 verfaßt von D.H.-G. Gießmann, Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Deutsche Zentralverwaltung für Volksbildung in der sowjetischen Besatzungszone Deutschlands 1946: Lehrpläne für die Grund- und Oberschulen in der sowjetischen Besatzungszone Deutschlands. Biologie. 1. Juli 1946, Volk und Wissen Verlags Berlin/Leipzig.
- Deutsches Pädagogisches Zentralinstitut 1955: Entwurf einer Grundkonzeption für den Biologielehrplan der Grundschulen (Klasse 5 bis 8).
- Deutsche Pädagogische Zentralinstitut 1956: Die Grundkonzeption des neuen Lehrplan für den Biologieunterricht in der Grundschule. *Biologie in der Schule*, 1956, Heft 2, S. 40-54.
- Deutsche Pädagogische Zentralinstitut 1959: Entwurf einer Grundkonzeption für das Lehrplanwerk der zehnklassigen allgemeinbildenden polytechnischen Oberschule.

- Deutsches Pädagogisches Zentralinstitut Sektion Unterrichtsmethodik und Lehrpläne 1962: Biologieunterricht. Methodisches Handbuch für den Lehrer. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Dietrich, Gerhard 1959: Sexuelle Erziehung allein Aufgabe des Biologieunterrichts? *Biologie in der Schule*, 1959, Heft 11, S. 511-513.
- Dietrich, Gerhard/Kummer, Gertrud 1979: 30 Jahre DDR – drei Jahrzehnte erfolgreiche Entwicklung des Biologieunterrichts. *Biologie in der Schule*, 28 (1979) 10, S. 401-421.
- Fischer, Hans 1956: Zum Entwurf eines Biologielehrplans für die Mittelschule. *Biologie in der Schule*, Heft 9, S. 424-423.
- Friede, Walter 1962: Gedanken zur unterrichtlichen Gestaltung der Unterrichtseinheit „Geschlechtsorgane und ontogenetische Entwicklung des Menschen“, *Biologie in der Schule*, Heft 1, S. 33-37.
- Grassel, Heinz 1962: Psychologische Probleme der Geschlechtererziehung. *Pädagogik*, 2. Beiheft, S. 8-24.
- Grassel, Heinz 1966: Tagungsbericht 1962. Konferenz über sexualpädagogische Probleme an der Universität Rostock. *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe, Heft 7/8, S. 703-704. (Ärztliche Jugendkunde, Jrg. 54, Heft 1/2 の論文の再録)
- Grassel, Heinz 1967: Jugend Sexualität Erziehung. Staatsverlag Berlin.
- Hager, Kurt 1959: Die weitere Entwicklung der polytechnischen sozialistischen Schule in der DDR. Referat auf der 4. Tagung des Zentralkomitees der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands am 15. Januar 1959. Dietz Verlag Berlin.
- Kirsch, Werner 1964: Zur Verwendung von „Aufklärungsliteratur“ bei der sexuellen Belehrung. *Biologie in der Schule*, Heft 12, S. 514-518.
- Krasse, Ehrhard 1956: Der Biologielehrplan für die Grundschule. Bericht über die bis Ende Oktober 1955 eingegangenen Stellungnahmen zu dem Lehrplanentwurf des Deutschen Pädagogischen Zentralinstituts. *Biologie in der Schule*, Jg. 5, Heft 1, S. 1-17.
- Krombholz, H. /Lengert, W. 1959: Zum Biologielehrplan der allgemeinbildenden polytechnischen Oberschule. *Biologie in der Schule*, Heft 7, S. 309-316.
- Kühn, Otto 1956a: Die Grundkonzeption des neuen Lehrplan für den Biologieunterricht der Grundschule. Bericht über die Konferenz der Ständigen Kommission für Biologie beim Deutschen Pädagogischen Zentralinstitut am 24. und 25. November 1955. *Biologie in der Schule*, Heft 3, S. 97-105.
- Kühn, Otto 1956b: Entwurf einer Grundkonzeption zum Lehrplan für den Biologieunterricht der zehnklassigen Mittelschule (Klassen 5 bis 10). *Biologie in der Schule*, Heft 6, S. 241-246.
- Kupke, Anni 1960: Sexuelle Erziehung allein Aufgabe des Biologieunterrichts? *Biologie in der Schule*, Heft 1, S. 15-17.
- Lehrbuch der Biologie für das elfte Schuljahr. Anthropologie. 1952 Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Lehrbuch der Biologie für das elfte Schuljahr. Anthropologie. 1954 Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Meyerhoff, Dietrich 1955: Zum Biologielehrplan in der Grundschule. *Biologie in der Schule*, Heft 6, S. 269-272.
- Ministerium für Volksbildung der DDR (Hrsg.) 1951a: Lehrplan für Grundschulen. Biologie 5. bis 8. Schuljahr. Berlin/Leipzig.
- Ministerium für Volksbildung der DDR (Hrsg.) 1951b: Lehrplan für Oberschulen BIOLOGIE 9. BIS

12. SCHULJAHR. Volk und Wissen Verlag Berlin/Leipzig.
- Ministerium für Volksbildung der DDR (Hrsg.) 1951c: Lehrplan für Zehnjahrschulen BIOLOGIE. Volk und Wissen Verlag Berlin/Leipzig.
- Ministerium für Volksbildung der DDR (Hrsg.) 1953: Lehrplan für Oberschulen BIOLOGIE 9. BIS 12. SCHULJAHR. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Ministerium für Volksbildung der DDR (Hrsg.) 1954: Lehrplan für Oberschulen BIOLOGIE 9. BIS 12. SCHULJAHR. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Ministerium für Volksbildung 1955: Anordnung über die Umwandlung von Oberschule in Zehnklassenschule. MONUMENTA PAEDAGOGICA 1970: 512-513.
- Ministerium für Volksbildung der DDR HA Unterricht und Erziehung (Hrsg.) 1956: Lehrplan für Mittelschulen. BIOLOGIE 10. Klasse. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Ministerium für Volksbildung der DDR HA Unterricht und Erziehung (Hrsg.) 1957: LEHRPLAN BIOLOGIE 9. UND 10. KLASSE MITTELSCHULE. Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Ministerium für Volksbildung 1959a: Lehrplan der zehnklassigen allgemeinbildenden polytechnischen Oberschule.
- Ministerium für Volksbildung 1959b: Übergangsmaßnahmen zum Lehrplanwerk für die zehnklassige allgemeinbildende polytechnische Oberschule.
- MONUMENTA PAEDAGOGICA 1969, Bd. VII/1 Dokumente zur Geschichte des Schulwesen in der Deutschen Demokratischen Republik, Teil 2: 1956-1967/68, 1. Halbband, Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- MONUMENTA PAEDAGOGICA 1970, Bd. VI Dokumente zur Geschichte des Schulwesen in der Deutschen Demokratischen Republik, Teil 1, Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin.
- Neuner, Gerhart 2000: Die lehrplanarbeit in der DDR. In: Keck, R. W./ Ritz, C. (Hrsg.) : Geschichte und Gegenwart des Lehrplans. Josef Dolchs „Lehrplan des Abendlandes“ als aktuelle Herausforderung. Schneider Verlag Hohengehren.
- Pieetsch, Albert 1955: Vorschläge für den Biologielehrplan der Grundschule. *Biologie in der Schule*, Heft 6, S. 273-276.
- Rothmaler, Werner 1955a: Der Lehrplan für den Biologieunterricht. *Biologie in der Schule*, Heft 3, S. 107-109.
- Rothmaler, Werner 1955b: Vorschlag für die Gliederung des Biologielehrstoffs der Mittelstufe. *Biologie in der Schule*, Heft 5, S. 222-225.
- Sende, Johannes 1966: Zu den Sexualinteressen der Schüler der Klassen 4 bis 8 und ihre Berücksichtigung in der sexuellen Belehrung. *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Rostock*, 15. Jrg., *Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Heft 7/8, S. 747-753.
- Tille, Rolf 1955: Zum Entwurf der Grundkonzeption für den Biologielehrplan der Grundschule. *Biologie in der Schule*, Heft 7, S. 300-307.
- Tille, Rolf 1992a: Lehrpläne und Biologieunterricht in der DDR: Erinnerungen und Erfahrungen (1) , *Biologie in der Schule*, 41 (1992) 10, S. 321-324.
- Tille, Rolf 1992b: Lehrpläne und Biologieunterricht in der DDR: Erinnerungen und Erfahrungen (2) , *Biologie in der Schule*, 41 (1992) 11, S. 382-386.
- Tille, Rolf 1993a: Lehrpläne und Biologieunterricht in der DDR: Erinnerungen und Erfahrungen (4) , *Biologie in der Schule*, 42 (1993) 4, S. 134-140.
- Trutschel, Gerhard 1960: Erfahrungen und Gedanken zur sexuellen Erziehung der Schüler in der neunten Klasse. *Biologie in der Schule*, Heft 10, S. 450-453.
- Uhlig, G. 1975: Zur ideologischen Grundkonzeption der Lehrpläne in der Geschichte unserer Schule seit

1945. *Wiss. Z. Karl-Marx-Uni. Leipzig, Ges.- u. Sprachwiss. R.*, 24. Jg. (1975) H. 4, S. 343-360.
- Ulbricht, Walter 1958: Der Kampf um den Frieden, für den Sieg des Sozialismus, für die nationale Wiedergeburt Deutschlands als friedliebender, demokratischer Staat. Dietz Verlag Berlin .
- Wernecke, Alexander 1966: Zur Einführung des präzisierten Lehrplan für den Biologieunterricht. *Biologie in der Schule*, Heft 1, S. 97-106.
- 安藤克雄・梅根悟編 1963:『現代教育改革』東洋館出版社
- 深谷昌志 1963:「東ドイツ」, 安藤克雄・梅根悟編 1963, pp. 151-178.
- 深谷昌志 1966a:「ソビエト軍の占領政策と東ドイツの教育改革」, 中野光・三枝孝弘・深谷昌志・藤沢法暎 1966, pp. 17-30.
- 深谷昌志 1966b:「教育の社会主義化と 10 年制一般陶冶総合技術学校の設立」, 中野光・三枝孝弘・深谷昌志・藤沢法暎 1966, pp. 107-133.
- 池谷壽夫 2009:「ドイツにおける性教育の歴史と現状」, 科研報告書『10 代の性感染症急増下の日本における性教育の実態と課題に関する研究』(代表橋本紀子・女子栄養大学教授), pp. 133-154.
- 池谷壽夫 2010:「ソ連占領下におけるドイツの性問題と性教育」, 『日本福祉大学社会福祉論集』第 123 号, 2010 年 9 月, pp. 1-29.
- 池谷壽夫 2011a:「1950 年代における DDR の性問題と性教育—「性的啓発」から「性教育」へ」, 『日本福祉大学 子ども発達学論集』第 3 号, 2011 年 1 月, pp. 21-44.
- 池谷壽夫 2011b:「1960 年代における DDR の学校・青少年・家族政策と性教育」, 『日本福祉大学社会福祉論集』第 124 号, 2011 年 3 月, pp. 1-26.
- 池谷壽夫 2011c:「科学的知識普及協会研究報告会議と性教育研究会議—1960 年代 DDR における性教育の動向(その 1)—」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第 124 号, pp. 57-88.
- 池谷壽夫 2011d:「第 3 回性教育研究会議と共同研究グループ「性教育学」の設立—1960 年代 DDR における性教育の動向(その 2)—」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第 124 号, pp. 57-96.
- 池谷壽夫 2011e:「性教育国際シンポジウムと 60 年代性教育の成果—1960 年代 DDR における性教育の動向(その 3)—」, 『日本福祉大学社会福祉論集』第 125 号, pp. 1-20.
- 池谷壽夫 2012a:「性教育の必要性和その目標—1960 年代 DDR における性教育の到達点と問題点(その 1)」, 『日本福祉大学子ども発達学論集』第 4 号, 2012 年 1 月, pp. 1-26.
- 池谷壽夫 2012b:「性教育の担い手, その方法と特別なテーマをめぐって—1960 年代における性教育の到達点と問題点(その 2)—」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第 126 号, 2012 年 9 月, pp. 1-38.
- 池谷壽夫 2012c:「子ども・青少年の性的発達段階とそれに応じた性教育プログラムの開発—1960 年代 DDR における性教育の到達点と問題点(その 3)」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』, 第 126 号, 2012 年 9 月, pp. 39-82.
- 三村和則 1989:「東独教育課程の特質と変遷」, 『教育方法学研究』(日本教育方法学会紀要) 14, 69-78.
- 中野光・三枝孝弘・深谷昌志・藤沢法暎 1966:『戦後ドイツ教育史』お茶の水書房.
- 小出達夫 1978:「ドイツ民主共和国における教育と法—1958 ~ 1962 年を中心に—」, 『北海道大学教育学部紀要』第 32 号, pp.151-188.
- ウルブリヒト, ワルター 1958:「ドイツ社会主義統一党の思想活動における若干の問題」, 『平和社会主義の諸問題』第 1 巻, 第 2 号, pp. 19-26.
- 吉田成章 2011:『ドイツ統一と教授学の再編—東ドイツ教授学の歴史的評価—』広島大学出版会.

付記: 本稿は, 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究 C「日独性教育比較に基づいた, 性教育における男子支援に関する研究」, 課題番号 24531031) にもとづく研究成果の一部である。